
Fate/Alternative -双黒-

眞神零一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / A l t e r n a t i v e - 双黒 -

【Nコード】

N 2 6 9 9 S

【作者名】

眞神零一郎

【あらすじ】

10年前の戦火の只中からその変化は始まった。そして10年。聖杯を巡る新たな戦争に、変化の中核・言峰士郎がマスターの一人として参戦する。

原作再構成物にして、言峰士郎物です。

中心人物のほとんどに大なり小なり変化があります。一部原作とはかけ離れている人がいますのでご注意ください。特に主人公は原作の面影ありません。全くの別人といってもいいくらいに変わっています。いっそオリ主といってもいいくらいの変化なので、衛宮士郎

が好きな方はご注意ください。

1月31日/Contract under the moon・(前書き)

タイトルの『双黒』はそうこくと読みます。

二つの黒いものという意味ですが、理由は呼んでいただければ分かるかと思います。

今回はプロローグなのでかなり短いです。

1月31日/Contract under the moon.

彼は一人、月を見上げていた。

武家屋敷の一角、庭に面した縁側に座り、煙草を燻らせながら。赤銅色の髪に、スクエア型の眼鏡をかけた灰色の瞳。眼鏡の所為か、その顔はやや幼く見えるが、年の頃は十代後半。煙草が吸える年ではないが、実に慣れた手つきで灰を落としている。

年が明けて暫く、一段と寒さの厳しい時節だが、その服装は至って軽装だった。

上下共に黒のスラックスにシャツ。着込むでもなくコートを肩に羽織っている。

冬と名のつく土地でありながら、冬でもそれほど気温は下がらない。とはいえ、コートを羽織っていても、シャツ一枚で寒さを防げるほどではない。

夜では尚更だ。

しかし彼は寒さに震えることも、またそれを気にした風もない。ふとして彼は、短くなっていた煙草を灰皿に押し付けると、横に置かれていた携帯電話を取り上げた。

躊躇なく一つの番号を呼び出し、そのまま通話ボタンを押す。

暫くのコールの後、留守番電話のアナウンス。

「俺だ。どうせそこで聞いてるんだろ？ 親父からの伝言だ。参加するなら早くしろ。席が全て埋まっても知らんぞ」

それだけ言うと、相手からの反応を確認することなく通話を切った。

溜息を吐きながら再び月を見上げる。

「最初にバーサーカー。次にキャスター、ランサー、ライダー、ア

サシン」

徐に呟いて、左手の甲を撫でる。

指の下には薄っすらと、直りかけの傷のようなものが浮かんでいた。

「残るは二騎」

「いいや、一騎だ」

突然後ろからかかった声に、しかし彼は驚くことなく小さく笑う。

「そうだろう？」

「ああ。そうだな」

彼の言葉に、声の主は満足げに頷いて腰を下ろした。

くすんだ金髪に金の瞳。ゴシック調のワンピース姿の少女。

その姿は威厳に溢れ、しかし禍々しい気を放っている。

暫し無言で月を見上げる。

どれくらい時間がたったのか。

少女は徐に立ち上がると、庭に降り、彼の前に立つ。

魔力の奔流。その一瞬後には、少女の姿は変化していた。

ヒビのような真紅の線が無数に走る漆黒の鎧。

顔を覆う鎧と同じ造りのバイザー。

そして手には、かつて聖剣と呼ばれた、だが今は闇に染まりし剣。

漆黒の騎士がそこにいた。

かつて騎士王と呼ばれた少女は、剣を手に、騎士としての礼を取る。

月を背負った少女は、黒く堕ちようともしなかった。

「既に捧げた剣だが、今再び貴方に捧げよう。我が剣、我が鞘、我

が全ての力を貴方に。これより私は貴方の剣となり、共に戦場を駆け抜ける力とならん」

少女の言葉と共に、彼の手に痛みが走る。

薄っすらと刻まれた傷は、淡い光と共にはつきりとその手の甲に刻まれた。

「契約は完了した。我が主よ」

そう言っ て礼を解き、再び黒のワンピース姿に戻る。

そして何事もなかったかのように彼の横に再び腰を下ろした。

「まあ契約したからといって何も変わらないがな」

刻まれた傷――令呪を見つめ、彼は小さく肩を震わせて笑う。

「それはそうだが、まあ気分の問題だ。第一契約しなければ聖杯戦争は始まらないだろう？ 主よ」

本来ならば契約ではなく召喚だが、彼らの場合、召喚は必要ない。何故なら、召喚されるべき相手は既にここにいるのだから。

「しなくとも、始まるときには始まるさ。それに俺は最初から参加が決まっていた、いや決められていたからな」

「それもそうだな」

肩を疎める彼に、少女も頷く。

そして二人は再び月を見上げる。

「後は凜が召喚すれば始まるな」

眩き、煙草を銜えて火をつける。

「……聖杯戦争が」

棚引く紫煙の向こうから、ただ月だけが二人を見つめていた。

1月31日/Contract under the moon・(後書き)

ということで、言峰士郎+セイバー・オルタでした。

単独ならともかく、この二人がセットのものは(少なくとも作者は)

見たことはありません。

あるんでしょうか？

1月31日 ? / The power to fight . (前書き)

ブログその2です。

ブログなのに普通の話並の長さになってますが。

1月31日 ? / The power to fight .

その電話が鳴ったとき、彼女―遠坂凜は、自室へ向かうために廊下 にいた。

電話の元へと向かうが、一向に受話器を取る気配はない。

深夜とまで行かなくとも、夜も更けたこんな時間に電話をかけてくる相手などそういない。

しかも時期が時期だ。

取らずとも、相手は予想がついた。

暫く鳴っていた電話が鳴り止むと、設定していた留守番電話が作動する。

『俺だ。どうせそこで聞いてるんだろ？ 親父からの伝言だ。参加するなら早くしろ。席が全て埋まっても知らんぞ』

名乗りもせずにそれだけ言うと、電話はぶつりと途切れた。

電話の相手は予想通り。内容も予想の範疇だった。

とはいえ、あまりに一方的なその内容に僅かに苛立つ。

自分の行動が見透かされているというのもそれに拍車をかけた。

「ちっ。言われなくても分かってるわよ」

舌打ちと共に電話を睨みつけ、そのまま彼女は踵を返す。

「見てなさい。アンタにだけは絶対に負けないんだから」

そうして、彼女は準備を始める。

電話の主の言う通り、参加するために。

そして、勝利するために。

幼きあの日にそう誓ったのだ。
亡き父に。
そして何より、自分自身に。

深夜。

彼女の力が最も高まる時間。

遠坂凜は屋敷の地下にいた。

準備は万端、とはいえないが、触媒以外は完璧にそろえた。

その触媒こそがこの儀式においても最も重要だと言うことは当然ながら承知の上だが、悔しいことに彼女が満足できる相手のそれを準備することは叶わなかった。

足りない部分は自分の力と運で。

そして最後の呪文を口に載せる。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

有り余るほどの手応えに、彼女は思わず拳を握り締めた。

彼女は確信する。

望む使い魔を召喚した、と。

精神集中のために閉じていた瞳を開く。

目の前に剣の騎士が立っていることを疑いもせず。

そして彼女の眼に飛び込んできたのは。

人影どころか、儀式前と寸分も変化のない地下室だった。

「え？ あれ？ ま、まさか失敗……」

あれだけの宝石を惜しみなく使った挙句すわ失敗かと愕然としかけた次の瞬間。

ズドオオオン

「は？」

とてつもない轟音が屋敷に轟いた。

破壊された部屋の真ん中で、彼は途方にくれていた。

「一体なんだというのだ？」

聖杯戦争に招かれたのだということは、分かった。

ただ、召喚場所が上空とは一体どういうことなのか。

突然空中に放り出され、対処する間もなく真下の屋敷に突っ込んだ。

本来ならば、召喚した魔術師の前に現れるのが普通の召喚と言うものだろうに、召喚された場所が空中では、当然ながら目の前に召喚主がいるはずもない。

しかも結構な高度から、何の処置も出来ずに（というかする暇もなく）屋敷に叩きつけられたのだ。

そのまま送還されなかったのが不思議なくらいである。

「乱暴にも程があるだろう、これは。よく無事だった、というか、むしろ何故無傷なのだ？」

自分が突き破ってきたために開いたであろう天井の大穴と、自身が埋もれている瓦礫の山、そして特に目立って外傷すらない自身の体を交互に見遣り、深々と溜息をつく。

「さて、こんな乱暴な招待をしてくれた主は一体どこにいるのやら」

主従の証である魔力のパスは繋がっている。

それを辿り、主たる召喚主がこの屋敷の中にも把握した。ならば遠からずここにやってくるだろう。

自分が落ちてきたときの音は、確実に聞こえているだろうから。

ならばと、瓦礫から身を起こし、丁度いい感じに倒れていた棚に腰掛け待つことにした。

「何なのよっ、何なのよっ！ 何だっつのよーっ！！」

成功したはずだった。

手ごたえは確かにあった。

それも、これ以上ないというくらいのものが。

だというのに、これは一体何なのだろうか。

召喚したはずの対象はいないし、かと思えばいきなり轟音は響くし。

全くもって何がなんだか分からない。

混乱と苛立ちと困惑が入り乱れ、若干キレ気味に、彼女は音源へ

と向かっていた。

そうして居間に到着。

音源は確かにこの部屋だ。

勢いのままにドアを開け、ようとして開かない。

「は？」

試しに何度もノブを回し、ドアを押す。

仕舞にはドアを乱暴に叩いてみる。

が、開く気配はない。

どうやら先ほどの轟音の影響で、ドアが歪んでしまったようだ。

「ええいつ！ 開けっ！」

唯でさえ苛立っていたところでさらに苛立つことが続き、彼女は思いつきりドアを蹴りつけた。

「やっと開いた。って、何よコレっ！」

勢いのままに飛び込んだ部屋の惨状に声を荒げる。

それはもう酷い有様だった。

天井には大穴が開き、部屋の調度類は見るも無残に瓦礫と化している。

そんな中、壊れずに秒針を刻み続けている時計が目に入った。それを見て、ふいにある事を思い出した。

（そういえば、ウチの時計、一時間、ずれてたような――）

つまり、今現在の時刻は午前一時過ぎ。

ベストタイムよりも一時間も早い時間だった、ということだ。

「……やつちゃった」

凜の、というよりは遠坂の家系には、一つの呪いが存在する。

ここ一番という大事な場面において、ありえないポ力をかますという呪いが。

（まあ、やつちゃったもんは仕方ないわよね。それよりも今は……）

とりあえず自分の仕出かした事を棚に上げ、無残にも瓦礫と化した居間を見遣る。

その丁度中央に、見知らぬ男が一人、倒れた棚の上で偉そうにふんぞり返っていた。

「誰よアンタ」

白い髪に褐色の肌。赤い外套を纏ったその男を、胡乱氣に睨み付ける。

「やれやれ。開口一番それかね？　こんな乱暴な招待をする人物がどれほどのものかと思えば」

やや乱暴な誰何の声に、彼は呆れたように肩を竦めた。

そしてちらりと凜を一瞥すると、これ見よがしに溜息をついた。

「なんですってっ!？」

明らかに見下したような態度に、凜もさらに苛立ちを募らせる。大事な儀式が失敗かと落ち込んだのもつかの間、屋敷に轟音は響き渡るわ、居間はめちゃくちゃで天井に大穴は開いているわ、見知

らぬ怪しい男が偉そうにふんぞり返って拳句に小馬鹿にしたような態度で煽ってくるわ。

立て続けの出来事に、凜の口調も家訓を忘れて荒くなる。

（コイツ、絶対性格歪んでる！）

「私が召喚された場所がどこ分かるかね？ この家の上空だ。つまりは空の上ということだな。さて、私はあまり魔術に詳しくはないのだがね、普通は、召喚した者の目の前に召喚されると思うのだが？ それがどうして空の上なんて場所に召喚されたのか、出来れば詳しく教えてもらいたいものだな」

（くっ。それは多分、というか確実に私が時間を間違えたせい、よね。で、でもそんなこと言えるワケないじゃないっ！）

「う、うるさいわね！ 多少召喚場所が変わったからって、アンタ別に怪我してるわけでもないんだからいいじゃない、別にっ！」

「怪我云々以前に、突然空に放り出された拳句、わけも分からず家に墜落した身としては、その原因を知っておきたいと思うのは当然のことと思うが？」

それはそうだろう。

凜としても理屈は分かるが、それを説明するとなると、自分の失態を白状せねばならない。

相手に弱みを見せるなど言語道断だ。

「いちいちうるさいわねっ！ 多少召喚に失敗したくらいによ！ 怪我がなくてあーよかったで収めておきなさいよ！ サーヴァントの癖に心が狭いわねっ！」

「心の狭い広いにサーヴァントは関係ないと思うが？」

「うるさーいつ！」

呆れる相手に、凜は振り切るように大声を上げた。

「そんなことより！ アンタは私のサーヴァントでいいのよね！？」
「そういう君こそ本当に私のマスターかね？ 流石の私も、こんな
乱暴な召喚をされては、認める気も失せるというものだ」

話題を変えてみれば、溜息混じりに切り返された。

（わ、私をマスターとして認めない、ですってっ！？）

男の言葉に苛立ちを募らせ、怒りに任せて声を上げようとして、
そしてふと思う。

よくよく考えてみれば、そんな目に合わされて怒鳴りもせず
に説明を求めるだけ、このサーヴァントは心が広いのかもしれないと凜
は思い直す。

自分だったらそんなことをした相手が目の前にいたら、認める云
々以前に、問答無用でブツ血killer自信がある。

いくらサーヴァントとて、殺されるまでは行かずとも、何かしら
危害を加えられていてもおかしくはない。サーヴァントならば、マ
スターとはいえ、高々人間一人をどうこうするなど簡単なことなの
だから。

にもかかわらず、相手は嫌味つたらしく煽ってくるが、それだけ
で、手を出してくるような気配はない。もしかしたら手を出すのも
面倒だと思っているのかもしれないし、異常事態に混乱しているの
かもしれないが。

「うっ。……悪かったわよ。召喚に失敗したのは事実だし、全面的
に私が悪かったわよ」

居間の惨状や突っかかってくるサーヴァントに苛立っていたが、そもその原因を作ったのは凜自身だ。

いくら家系的呪いたるうつかりのせいで時間を間違えたとはいえ、自身に非があることを認められないほどに子供ではない。

「ふむ。自らの非を認める、か」

「うるさいわね。アンタの態度はむかつくけど、元を正せば私が原因だってちゃんと分かっているわよ。いくらアンタがむかつくからって、それを認められない程、私は愚かではないつもりよ」

今までの態度とは打って変わり、愁傷な凜を、相手は見定めるようにじっと見つめる。

そうして暫くそのままの状態が続き、男は徐に頷いた。

「ふむ。少々気が短いところはあるが、きちんと自分の非を認められる人間性に加え、儀式に失敗しながらも私を呼び出すことに成功し、さらには召喚儀式のあとでもあれだけ騒げるほどに魔力活力共に十分、パスを通じて供給される魔力量も申し分ない。まあ年齢的に少々経験不足の感は否めないが、君の能力が高いのは良く分かった」

「え、えっと、つまり、私をマスターだって認めてくれるの？」

突然の変化に、凜は戸惑いながら尋ねる。

「ああ。君をマスターと認めよう」

「どついう風の吹き回し？ さっきまでやれ認める気が失せるだのなんだの言ってたくせに」

突然の変わりようには、凜でなくとも疑問を覚えるだろう。

「あのまま君が謝りもせずに逆ギレしたままだったら認めるつもりはなかったが、魔術師としての能力が高いことはすぐに知れたからな。まああとは性格というか、性質の問題だったのだよ。いくら主従とはいえ、気に入らない相手では従う気も失せるだろう？」

普通の魔術師ならば、召喚儀式を行ったその瞬間に、魔力体力を消耗して意識を失っていただろう。

対して凜はいえ、召喚自体はミスったものの、直後に地下の工房から居間まで走り、歪んだドアを蹴り開けて、サーヴァント相手に口喧嘩を展開したのだ。

「つまりさっきまでの嫌味の数々は、私を試したって事？」

言い分も分からないではないが、いい気はしない。

多少の恨みを込めて、半眼で相手を睨む。

「半分は、な」

「半分ですって？」

「確かに君の性格を知るために多少試した部分はあったが、空中に召喚されて云々は事実だし、それに付随する言葉は真実私が思っていたことだ。というか、あんな状態では文句の一つも言いたくなるだろう？」

「うっ」

召喚にさした云々に関しては全面的に自分が悪かったと認めている手前、何も言い返せない。

第一、あれでは文句を言っくらい当然だろうと凜も思う。

「ってことは、あそこで私が非を認めたからあれで済んだけど、認

めてなかったらさらに言われてたって事？」

「まあそうなるな」

「ふうん？　たとえばどんな？」

好奇心を刺激されてたずねてみる。

「そうだな。君は自尊心が高そうだから、『戦闘に参加するな』とか、『足手纏いになりそうだから安全な所に隠れている』とか、『対外的には主従として振舞うが、それ以外では好きにやらせてもらう』などといったことを、嘲笑あるいは鼻で笑って言っていたかもしれない？」

にやりと笑うのを見て、凜の米神が引き攣った。

（うつわ。そんな事言われてたらキレてたかも。キレた拳句売り言葉に買い言葉で虎の子の令呪使っちゃたり？　あー。本気でありえそうね。謝っというて良かったわ）

有り得たかも知れない未来を想像して、内心物凄くほっとした。

「くくつ。まあそうなる前に君が非を認めてくれたからな」

凜が何を思ったのかある程度察して苦笑する。

「ふん？　マスターだって認めてくれたんならいいわ」

恥ずかしさにそっぽを向くが、じわじわと認められたことに対する喜びが湧いてくる。

試されていたとはいえ、一時は『認める気が失せる』とまで言われていた反動か、余計に嬉しさが募る。

恥ずかしさと嬉しさを押し隠して、冷静を装いながら話を進めた。

「それで聞きたいんだけど、アンタ、クラスは？ 見たところ、剣も槍も弓も持つてないみたいだけど、まさかそのナリでキヤスターとか言わないでしょうね？」

サーヴァントのクラスに容姿は関係ないのだが、客観的に見て、男は魔術師というよりか戦士のようだ。この鍛えられた筋肉の持ち主が、もしもキヤスターなら、よほどの武闘派魔術師だ。

さらに、アサシンということも考えにくい。この姿形では暗殺者にはとても見えない。

となれば残るはセイバー、ランサー、アーチャー、ライダーの四体。

「君は馬鹿かね？ そんな一目でクラスが分かるようなもの、常に持ち歩いているわけがなからうが」

「う、うっさい！ それで！？ アンタは何のサーヴァントなのよっ！」

言われてみれば確かにそうだ。

何故思い至らなかったのか。

凜は顔を真っ赤にして捲くし立てた。

「さてな。なんだと思う？」

「え？ ……セイバー、じゃないわよね？」

男はにやりと笑って問いかけた。

戸惑いながらも、一抹の望みをかけて尋ねてみる。

「違うな」

見事玉砕。

それもそうだろう。

あれだけの不手際で、望みのサーヴァントなど呼べるはずがない。

「そう、よね。……はあ、全くドジったわ。あれだけ宝石を使っておいてセイバーじゃないなんて」

むしろあれだけミスをしておいて望みどおりのサーヴァントが引き当てられていたら、きつと一生分の運を使い果たしていたに違いない。

「む。セイバーでなくて悪かったな」

「まあ仕方ないわ。自業自得つてもんでしょ」

肩を竦めると、男はふいと凜から視線を逸らした。

「どうせアーチャーでは派手さにかけるだろうよ。だが後で必ず今の言葉を悔やませてやる。その時になって謝っても聞かないからな」
「は？」

（え？ 何？ もしかして拗ねてるの？）

その意外な姿に目を丸くして、そして凜はくすりと小さく笑った。

「あら、意外と可愛いところがあるのね、アーチャー？」
「む」

可愛いと言われたのが心外だとばかりに眉を顰める。
そんな様子にますます凜は笑みをこぼす。

「それじゃあ私を後悔させてくれるのを楽しみに待っているわ、アーチャー。そうなたら素直に謝ってあげるわよ」

くすくす笑う凜に、アーチャーもふつと小さく笑った。

「ああ、忘れるなよマスター。君のサーヴァントがどれほどのものか、知って感謝するがいい。だがまあ、その時になって謝ってきても、私の気は晴れないだろうがな」

「あら、そうなの？」

「ああ」

そしてまた二人で笑いあう。

「あ、そういえばまだ聞いてなかったわ。ねえ、アーチャー、貴方、どこの英霊？」

凜の問いに、アーチャーは笑みを消して口ごもる。

「そのことだが、マスター」

「なによ。まさか答えられないなんていわないでしょうね？」

「はっきり言おう。分からない」

「は？」

きつぱりと言い切ったアーチャーに、凜は言われた意味が分からず間抜けに返した。

「分からないと言ったのだ」

「どういうこと？」

「恐らく召喚時のミスが原因だろう。記憶に混乱が見られる。名前

や素性といったパーソナリティが欠落している」

あまりのことに、凜は呆然と立ちすくむ。

「まあさして重要でもないから構わないんだがな」

「構わないって、つまりアンタは自分が何時どこの誰なのか、分からないってことでしょ！？　どういう戦い方をするかとか、どれくらい強いのかとか分からないと、作戦立てようがないじゃない！」

サーヴァントのパーソナリティとはつまり、どういう武器を使つてどういう風に戦い、どうやって勝利するのか、その根幹の部分だ。それが根こそぎ分らないとなれば、作戦云々以前に、戦えたものではない。

悲鳴のような凜の言葉に、だがアーチャーはまるで『それがどうした』とばかりにまっすぐに凜を見つめた。

「何を言う。私は君が呼び出したサーヴァントだぞ。それが最強ではないはずがない」

絶対の自信と信頼を込めて、まっすぐにそう言った。

「―――！」

呆然と。

凜は自身のサーヴァントを見つめた。

どうやら凜が思っていた以上に、彼女はマスターとして認められているらしい。

それを理解し、凜は赤面した。

嬉しくないはずがない。

相棒となるべき己のサーヴァントに、これほどまでに認められて

いるという事実には。

「……ありがとう、アーチャー。そうね、貴方の正体に関しては、追々見せてもらおうとするわ」

「ああ、期待している。それよりもマスター、この部屋はどうするのだ？」

「あ。どうしようかしらね。うーん。そうだ、アーチャー。片付けお願い」

完全に忘れていたようだ。

アーチャーに指摘され、改めて部屋を見回す。

とはいえ、この状態では業者を呼ぶなりしなければどうにもならないだろう。

「マスター。私はそこの使い魔とは違うんだが？」

「分かってるわ。でも業者を呼ぶにしても、この状態をどう説明すればいいのよ。空から隕石でも降ってきたって言えばいいの？ 第一修復工事中、どこで生活するのよ」

「む」

天井に大穴が開いている状態では、工事にも時間が掛かるだろう。仮にも聖杯戦争が始まるというときに、自らの拠点を使えなくては元も子もない。

第一、修理費もホテルなどの滞在費もかかる。

唯でさえ凜の得手とする宝石魔術はお金がかかる。

資産が潤沢にあるわけでもない遠坂家にとって、それらのお金すら惜しいのだ。

「何も完璧に元の状態に戻せって言ってるわけじゃないのよ？」と
りあえず天井塞いで、瓦礫の撤去くらいなら貴方にだってできるで

しょう？ 散らかしたのは貴方なんだから、それくらいはできるわよね？」

サーヴァントの身体能力ならば、天井に上るのもそうたいしたことではない。

瓦礫といっても家具の破片とか、そう大変なものでもないだろう。

「む」

上から目線の凜の言葉にアーチャーが黙る。

「このままの状態にして、敵のサーヴァントに天井の穴から侵入されたとか、そんな間抜けなことになりたくないでしょ？」

「む」

「できないって言うならやらなくても構わないわよ。私のサーヴァントにその程度のことも出来ないっていうなら、ね？」

「むう」

アーチャーが意外と負けず嫌いな性質だと、今までの会話で分かっていた凜は、挑発するように言葉を続ける。

この程度で乗ってくるとは思えないが、万が一この程度で乗ってくれるなら儲け物だ。

最悪令呪を使おうかとも考えたが、こんな些細なことで使うのももったいない。

なにせ令呪は、サーヴァントに対する、たった三回限りの絶対命令権なのだ。

このような瑣末事に使えるほど安くはない。

アーチャーは忌々しげに凜を睨みつけると、諦めたように溜息をついた。

「承知した。明日、この部屋を見て驚愕する程度には片付けておいてやろう」

「楽しみにしてるわ。それじゃ、よろしくね。私はもう寝るわ」

肩を落とすアーチャーを見遣り、凜は居間を後にした。

彼女が最後のサーヴァントを召喚したことで、七人のマスターとサーヴァントが出揃った。

今宵、運命の幕が上がる。

——第五次聖杯戦争、開幕。

1月31日 ? / The power to fight . (後書き)

凜編でした。

プロローグの対となる話だったのでプロローグ?としましたが、長さにもものすごい差が……。

原作と違い、主従となるまであまり時間が掛からなかった上、令呪も使いませんでした。そのせいか、随分駆け足というか、展開が速いというか、唐突な部分がありますね。

その原因は凜の性格ですが、原作と比べて結構変化があります。セイバー・オルタ、綺礼、ギルに育てられた士郎と、付随して綺礼とも原作以上にかかわりがあつた10年ですから、嫌味とか皮肉とかには慣れています。

次話ですが、このまま凜がメインです。原作との変化の一端が分かる話となる予定です。

2月1日/The world of the possibility

第1話、になります。

主人公は一切出てきません。

彼女は今、表面上は、優雅に紅茶を飲んでいた。

彼女が召喚した、弓兵であるはずのサーヴァントが淹れた紅茶を。サーヴァント召喚から一夜明け、今は朝とかむしる昼近い。

召喚の儀式で大量に魔力を消費したことに、元々の低血圧も手伝って、彼女が目覚めたのはほんの数十分前のことである。

寝起きの悪さのためにすっかり頭からすっぽ抜けていたが、起きてこの部屋に入ると同時に夕べの出来事を思い出した。

慌てて部屋を見るが、昨日の惨状の名残すらない。

一瞬、昨日のあれは夢だったのかと錯覚すら覚えてしまう程に、見事に部屋は修復されていた。

彼女とて、一晩で総てを元通りに出来るわけがないと思いつつ、瓦礫の排除とか壊れたものの選別とか位なら出来るだろうと思って命令したのだ。

まさかたったの一晩で、屋根に開いた大穴も、壊れた家具も、散乱していた瓦礫も、すっかりさっぱり修復されているとは夢にも思わなかった。

呆然と眺めつつ、自分が召喚したのは大工のサーヴァントだったのだろうかと半ば本気で考えてしまった。

「ああ起きたか。流石にそろそろ起こそうかと思っていたところだ」

呆然としている凛に気づいた弓兵が、台所から声をかけてきた。

「貴方、何してるの？」

半眼で見遣る。

なんとこの弓兵はエプロン着用であった。

どこから持ってきたのかシンプルな赤いエプロンで、奇妙なことに違和感なく着こなしている。

「ふむ。台所ですることなどそう多くはないと思うが？ 当然ながら料理をしていたのだ」

「貴方サーヴァントよね？ 何で料理なんてできるのよ」

料理が出来るサーヴァントなど聞いたことがない。

まあ凜は他のサーヴァントなど知らないが。

「何故と言われてもな。できるものはできるのだから仕様があるまい」
「大体料理って何よ。まさか貴方、サーヴァントの癖に食事が必要なの？」

本来サーヴァントに食事など必要ない。

それに相当するものは魔力であるし、そもそも生物ではないのだから。

最も、食事からでも多少は魔力を吸収できるが、効率がものすごく悪い。

「そんなわけなからう。君のだ」

呆れたように肩を竦めると、テーブルに皿を並べていく。

炊き立てご飯に豆腐の味噌汁。玉子焼きに焼鮭。

並べられていく料理を見つめ、ふと凜は思う。

（うちに食材あったっけ？）

「ご飯に豆腐に味噌に卵までいい。あつたのを覚えている。」

だが鮭。

（鮭なんてなかったはずなんだけど？）

「私、朝は摂らないんだけど？」

「今は朝ではなからう？ 時間的にはブランチだ」

「それに鮭なんてどこから持ってきたの？ 少なくともうちにはなかったわよね？」

「ふむ。まあ気にするな」

「気になるわよ。第一、何で和食なんて作れるのよ」

作れるということはこの際脇にのけおくとして。

トーストにスクランブルエッグなんて典型的な洋食ならまだ分かんなくもない。

時代はともかく、世界中で広く食べられている。

だが和食となると基本的に日本限定だ。

昨今日本食がブームになっているとは聞くが、それは寿司とか一部の料理のことであって、和食が広く知られているわけではない。

特にこういった典型的日本の朝ごはんならば、ほぼ日本人以外は食べないだろう。

作るとなるとなおさらだ。

第一英霊が存在していただろう時代に日本食は普及していないだろう。

「貴方もしかして日本の英霊なの？ ぶっちゃけ外見からはとてもそうは見えないんだけど」

エプロン姿の弓兵を訝しげに見遣る。

勿論、日本人の英霊がいてもおかしくはない。

ないが、日本で英霊になるほどの功績を残しているとすれば、ほ

とんどが武士だろう。

日本人で弓を使いなおかつ英霊になってもおかしくない人物といえ、いなくもないが、少なくとも褐色の肌ということはありえない。

日本人は黄色人種のための単一民族なのだから。

「だから素性に関しては分からんと言ったろう。私のことはいいからさっさと食べる。冷めてしまうぞ」

肩を疎める弓兵は、凜に食事を促してエプロンを脱いだ。

「気になるけど、まあいいわ。せっかく作ってくれたんだし、頂くわ」

色々と思うところはあるものの、料理に罪はないのだし、第一もつたいたい。

溜息混じりに席に付き、凜は箸を取り上げた。

そうして食事を終えると、弓兵が席を立つ。

「お茶でも飲むかね？　まああいにくと紅茶だが」
「頂くわ」

和食だったのでいささか不似合いだが、致し方ない。
そうして暫くして、弓兵が凜の前に紅茶の入ったティーカップを差し出した。

ストレートのまま一口。

「……おいしい」

思わず声が零れた。

「ふむ。ならば重畳」

凜の様子を満足げに眺めて一つ頷く。

「料理だけじゃなくて紅茶まで淹れられるなんて、貴方本当に弓兵？」

弓兵というのは、もしかして自分がそうと認識していないだけで、戦闘技能の他に、大工仕事とか執事とかの技能も修めた万能職なのだろうか。

まさかとは思うが、サーヴァント全てがそうだったりするのだろうか？

「弓兵だ。料理やらが何故できるのかと聞かれても分からんよ。素性に関しては何も分からんと先ほども言っただろう？」

「そうだけど、ってやっぱり記憶の方はさっぱりなのね」

一晩たてば思い出すようなご都合主義を期待していたわけではないが、わかってはいても溜息が漏れる。

「はあ」

「何かね、マスター。溜息などついて。心配事か？」

問ってくる弓兵に胡乱気な視線を向けつつ、もう一度わざとらしく溜息をついた。

「いいえ。なんでもないわ」

「む。ならば溜息などつくものではない。幸せが逃げて行くぞ?」

何故サーヴァントが、そんな日本でしか通用しないような迷信なんて知っているのだろうか。

「溜息の原因が何言ってるのよ」

「む。私の原因か? 君が溜息をつくようなことを、何かしたかね?」

心外だとばかりに眉根を寄せる。

「ええ色々ね。ま、別にどうでもいいわ」

言ったところでどうなるものでもなし。というよりは、言うだけ無駄のような気がする凜だった。

「それよりもマスター。君は一つ、大切なことを忘れてないかね?」
「大切なこと?」

凜が首を傾げると、アーチャーはやれやれとばかりに大仰に溜息をついた。

「全く。契約において最も重要な交換を、まだ私たちはしていないだろう?」

『最も重要』と言われて凜は考え込む。

(何かあったかしら?)

「あ、そういえば名前」

「思い至ったか。まあ今からでも遅くはない。それで、マスター？君の名前を聞きたいのだが？」

名前の交換は、実はたいした意味はない。

サーヴァントとマスターは、令呪によって力ずくで結ばれた特殊な主従関係だ。

一般的な使い魔との契約では名前の交換は強い意味を持つが、こ
と聖杯戦争の主従においては、名前の交換など必要ない。

あるとすれば、サーヴァントとマスターの、信頼関係の一助にな
るくらいだ。

だが、信頼関係を築く上では欠かすことの出来ない要因である。
それを『大切』だと言い、なおかつサーヴァントの方から聞いて
くるということには、とても大きな意味があった。

「凜よ。遠坂凜。好きなように呼んで頂戴」

アーチャーからある意味では『信頼関係を築きたい』と言ってい
るも同然の申し出に答える。

「それでは凜と。……ああ、この響きは実に君に似合っている」

暫し噛み締めるように凜の名前を呟いた後、一つ頷いて笑った。

「——っ！ア、アーチャー！紅茶おかわり！」

動揺を隠すように、紅茶のカップをアーチャーに突きつける。

「まだ残っているようだ？」

「っ！あ、熱いのが飲みたいのっ！いいからおかわり！」

突き出されたカップと凜を見比べ訝しげに眉を寄せるアーチャーに、凜は強引な理由をつけてさらにカップを突き出した。

「やれやれ。では少々待っていたまえ」

凜からカップを受け取ると、肩を竦めて台所へと姿を消した。アーチャーの姿が見えなくなると同時に、凜はほっと溜息をついた。

紅茶を入れなおして持ってきたアーチャーからカップを受け取り、口をつけようとした所でふと思い出す。

「そうだわ、アーチャー」

「なにかね？」

紅茶のカップをソーサーに戻し、アーチャーを見遣る。視線で自身の対面に当たる椅子を示し座るように指示すると、肩を竦めてアーチャーはそれに従った。

居住まいを正し、正面からアーチャーを見つめる。

「最初に言っておくわね。他のマスターについてなんだけど、たった一人を除いて私は知らないわ」

「む。つまり一人は知っているということかね？」

「ええそうよ。ああ、いえ。もう一人二人候補がいなくもないんだけど、とりあえず今は脇においておくわ。で、この聖杯戦争、私の最大にして最強の敵になるのがそいつよ。まあまだあいつもマスタ

「にはなっていないとは思うけど、冬木在住の魔術師だし、確実にマスターになるでしょうね」

断言する凜の言葉に、アーチャーは眉を顰めた。

（凜の最強の敵だと？ そんな人物がいたか？）

『かつての記憶』を探るも、彼女の周囲にそんな人物がいた覚えはない。

敵となるだろう人物ならば心当たりがなくてはならないが、今現在の段階ではそれは凜の知らぬ所の話だ。

実はアーチャー。既に記憶は取り戻している。凜には話していないし、話すつもりもない。

第一、話したら彼女は盛大に混乱するだろうし、目的を遂げるためには障害になる可能性が高い。

磨耗するほどの永い時の中で、やっと巡ってきたチャンスだ。

これを逃せば、次のチャンスが来る可能性は限りなく低い。

故にこの機会を逃すわけには行かないのだ。

凜には見えぬテーブルの下で、強く拳を握り締める。

「それは言い過ぎではないかね？ その人物がどういった人間なのかは知らんが、ほかにマスターはいるのだ。いずれも魔術師、それもこの聖杯戦争に参加するくらいだから並のそれではなかるう？」

冬木の聖杯戦争は、有名と言うわけでもないが全くの無名と言うわけでもない。

かつては御三家で規定数のおよそ半数を占めていたマスターも、今代ではその一角が崩れたことから、半数以上を外来の魔術に占められることだろう。

それぞれ半端な覚悟や能力では挑んでくることがないだろうし、いくら凜が才能あふれる魔術師だとて、世界中を探せば凜以上の魔術師なぞそれこそ数多く存在するのだ。

最も大半の魔術師は引きこもりで、そう滅多に外に出てくることはない。

だが、聖杯戦争の勝者に与えられるものには、そんな者たちが参加しても可笑しくはないだけの魅力があるのだ。

「そんなことくらい分かってるわよ。でもね、よほどの相手が出てこない限り、あいつの方が厄介だって、『魔術師・遠坂凜』の名において断言してやるわ」

確かに凜は、他にどんなマスターが参加しているのか全く分からないし情報もない。

だが彼のことならば、とてもよく知っているのだ。

「……それほどの人間なのかね？」
「ええ」

きつぱりと断言する凜に、アーチャーも眉根の皺を深める。

（一体誰だ？ 有力なのは外道神父あたりだが……）

確かに凜は彼のことを嫌ってはいるが、敵対はしていなかったはずだ。

あくまでも今現在は、という注釈がつくが。

「知っているというからにはそれなりに知己のある人物ではないのかね？」

「そりゃそうよ。私の幼馴染だもの」

「む。そんなに親しい人間なのか？　大丈夫なのかね？」

相對したときに戦えるのかと問えば、凜はなんでもないことのよう
に肩を竦めた。

（幼馴染？　彼女に魔術師の幼馴染などいたか？　少なくとも俺は
知らんぞ？）

アーチャーは態度に出さずに混乱していた。
記憶と差異がある。

幼馴染ということは、凜とそれほど年の変わらない人物だろう。
だがこの冬木に、凜と年の近いの魔術師は他に二人しかいないが、
どちらも違うはずだ。

一人は彼女の妹だし、もう一人が魔術師だと彼女は知らないはず
だ。妹はともかく、もう一人とは親しい間柄でもなかったはず。

（俺の知らない人物か？）

「心配要らないわ。私もそいつも魔術師。もっともそいつも魔術使
いだけど、互いに覚悟は出来てるわ」

「ふむ。いらぬ心配だったようだな。凜がそこまで警戒するマスタ
ーの名くらい、聞かせてほしいものだな」

（魔術使い？）

先ほど頭に浮かんですぐに打ち消した存在が浮かび上がる。
妹ではないもう一人は、魔術師ではなく魔術使이었다から。
だがアーチャーは知っている。
それだけは絶対にありえない、と。
だが続く凜の言葉でそれは覆される。

「士郎よ。言峰士郎」

はつきりと。彼女はそう言った。

「……ことみね、しろつ……だと？」

思わず目を見開いた。

「そうよ。私の兄弟子にして今回の聖杯戦争の監督役でもある言峰綺礼の息子。魔術を行使するものでありながら、教会にも席をおき、なおかつ代行者の真似事までする、親子揃った蝙蝠野郎」

だが凜は、そんなアーチャーの僅かな変化に気づくことなく、説明を続ける。

（外道神父に息子？ 俺が知る限り、やつに息子はいなかった。それに、士郎だと？ まさか……）

その名前には覚えがある。いやと言うほどに。だが、少なくともその名前を持つ人物の姓は言峰などではなかった。

そしてふいに思い至る。

彼女の祖は誰だった？ 何を得意としていた？

（ま、さか。平行世界、か？ 衛宮士郎が存在しない世界、だとも言うのか！？）

そして続く凜の言葉に、アーチャーは、自身が知る記憶との、決定的にして致命的な差異を知る。

「10年前に綺礼の養子になった時からの付き合いで、立場的には同門の弟子って所ね」

（10年前、となると確定だな。つまり何か？ 俺は目的を達することが出来ない、そういうことか？）

内心で嘲笑する。

永い永い時をかけ、ようやく手にいれたと思ったチャンスが、掴みかけた瞬間に泡沫と消えた。

ここが平行世界であるならば、彼の目的は果たせない。

（はっ。世界はとことん、掃除屋を放すつもりがないと見える）

チャンスを得たと内心狂喜した分、反動は大きい。

握り締めた拳からふと力が失せ、諦めと失意から、全身からも力が抜けた。

だが、多少予感があったのだ。

昨日、言い合いとなった凜との会話で。

全て思い出してから反芻した時に、わずかばかり彼女の性格に違和感を持った。

アーチャーの知る彼女は、記憶の中の彼女は、あの時謝るだろうか、と。

答えは否だ。

彼女のプライドは、それはもうとても高い。

例え自分に非があろうとも、自分から謝ることができるほど大人ではなかった。

恐らくそれが、彼の知る遠坂凜と、今ここにいる遠坂凜との差。そしてそれをもたらしたのが言峰士郎の存在だ。

衛宮士郎と似て異なる存在。

根幹を同じくする、平行世界の存在。

エミヤシロウ
自分とは、違う存在。

今自分が彼を殺しても、世界は何も変わらない。
殺されたのは言峰士郎で、殺したのは衛宮士郎。
彼と自分は、違う存在なのだから。

「あいつは宝石魔術なんか欠片も使えない、っていうか、あいつの魔術は特殊なのよね」

説明を続ける凜の言葉を、アーチャーは他人事のように聞いている。
た。

今はまだ、整理が付かない。
目的を失ったことを理解はしつつも、飲み込めない。消化できない。
い。

だが、己は遠坂凜のサーヴァントである。
彼女に己が最強だと語った言葉を嘘にするつもりはない。
ここで、終わりにするつもりはない。

だから。

今は己の問題を脇に置く。

彼女が語っていることは、敵マスターの情報なのだ。
情報を制するものが戦争を制す。

何しろ彼は、余人が知りえない、衛宮――言峰士郎の情報を持っているのだ。

己が知る情報と、実際の情報を照らし合わせて差異を埋めれば、それは力となる。

最も、凜から最大の敵と認定されている時点で、衛宮士郎とは随分と異なるのだが。

（――衛宮切嗣ではなく、言峰綺礼に拾われたということか。あの神父に拾われて人間乾電池にされなかったのが不思議なところだな。

それに、衛宮士郎とはずいぶん異なる。凜の口調からすればすでに投影魔術は使えているようだが、この頃はたしか、魔術回路すらいちいち作り直していたのではなかったか？　へっばこすぎて一般人と勘違いされていたはずだが、それが拾い主が違っただけで、凜から最も警戒される存在となつているとは……）

「魔術は一部を除いてへっばこもいいところだけど、事戦闘能力に関しては私じゃ足元にも及ばないわね。へっばこのくせして私よりも魔力量は多いし」

（む？　今聞き捨てならんことを聞いたぞ？　誰がなんだって？）

「凜も魔力量は多いほうだと思うのだが、それよりも多いのか？」

「ざつと二、三倍くらいはあるかしらね。魔術回路は私のほうが断然多いってのに！」

（凜の二、三倍、だと？　ありえん！　それでは英霊並かそれ以上ではないか！　いったいこの世界はどうなっている？）

「何よりむかつくのが、あいつの魔術のコストパフォーマンスの良さね。アレだけの威力で使うのが魔力だけって、初めて見たときには殺してやろうかと思つたわよ」

「凜の得手とする宝石魔術は金食い虫だろうからな」

拳を握る凜に、肩を竦める。

「そうなのよっ！　威力やら効果やらに比例して金食うつてのに、あいつときたら元手タダで私を上回るのよっ！？　だあ！！　思い出しただけでも腹が立つッ！」

だんつと拳をテーブルに叩きつける。

威力や効果が高いもの――つまり多量の魔力を込めることができた
り、魔力効率がいいものは、総じて高い。

元々宝石というものが自体が高いが、そういった宝石は自然とラン
クが高い（純度が高いとか、不純物が少ないなど。つまりは上質な
もの）上に、魔術に使用するために選別されたものは、さらに高い。
一般的な宝石店などでも宝石は買えるが、そういった魔術に適す
る宝石は、大抵魔術礼装などを専門に扱う商店やら組織やらが取り
扱っている。

当然、そういった価値も付加されているために、一般的な宝石よ
りも割高だ。

拳句、宝石魔術で使用する宝石は、基本的に使い捨てである。つ
まり、一回きりしか使えない。

必然的に数をそろえなければならぬため、遠坂――というより宝
石魔術を扱う家系は基本万年金欠だ。

勿論それなりの資産を持っている家系もあるが、少なくとも遠坂
家は資金不足に苦しんでいる。

何せ出て行くばかりで収入たる収入がない。

霊地の管理者として、僅かなりとも収入はありはするが、現当主
は高校生。

資産運用以前の問題で、確たる収入が存在しない。

結果、お金には煩くなってしまうのだ。

対する言峰士郎の得手とするだろう投影魔術は、本来ならば大し
て役に立たない魔術であるが、こと彼らが使うそれに関して言えば、
その有用性は著しく高い。

何しろ凜の言葉どおり、魔力消費のみで、宝具ですら実用できる
レベルで作り出せる。

しかも一定以上のダメージを受けるか術者が破棄しないかぎり、

半永久的に存在する。

とはいえ、彼らが作り出せるのは武器、それも基本は剣のみ。多少の無理をすれば防具程度までといった限定的なものだが、こと戦闘においては強力だ。

当然ながら本来の投影魔術は僅かな時間のみの、それも外見のみの複製であるため、実用性どころかもものすごく効率が悪い。

これが魔術協会にでも知られば、封印指定は確実なほどの異端である。

「落ち着きたまえ。言っただころで詮無いことだろう」

「分かってるわよっ！　ただの愚痴よっ。いいじゃないっ、言うのはタダなんだからっ！」

溜息を漏らすアーチャーに、凜は思わず立ち上がる。

「タダより高いものはないとも言うがね」

「ふんっだ。いいですよーだ。どーせ私は万年金欠ですよーだ」

やれやれと肩を竦めると、凜はふてくされたように鼻を鳴らしてどっかりと椅子に座り込んだ。

「凜。今はすねている場合ではないと思うのだがね？」

「分かってるわよ。言ってみただけ」

指摘すれば一転、至極真面目な顔をしてアーチャーを見遣る。

「話を戻すけど、一対一で戦ったら、私じゃあ勝ち目どころか時間稼ぎが関の山ね。それは多分、どのマスターでもそう変わらないと思うわよ。特にあいつの場合、得手は直接戦闘、さらに言えば遠近両用なんだから溜息しか出ないわね。遠距離から狙撃でもされたら

一発よ。で、そうなつてくると問題なのはサーヴァント。あいつのサーヴァントが何か、それによつてはやりようもあると思うわ。まあ厄介であることに変わりはないけどね」

「ふむ。参考までに、言峰士郎とやらと組まれて厄介なサーヴァントは誰かね？」

「そう、ね。もつとも厄介なのはキャスターね」

暫し考えて、凜はサーヴァント中最弱とも評される名前を挙げる。

「最弱とも言われるクラスかね？」

「確かにサーヴァント単体では最弱でしょうね。でも、その前衛を勤められるマスターがいたとしたら？」

「なるほどな。英霊になるほどの魔術師。詠唱できる余裕さえあれば最強にもなりえる、ということか」

「そういうこと。本来マスターは後衛。サーヴァントが前衛つてのが常識だけど、サーヴァントでもキャスターは完全後衛。ある意味マスターよりも後衛タイプなんだから後衛同士組んだって自滅がいのところよ。まあだから最弱のサーヴァントなんて言われてるわけだけど、言い換えれば前衛を勤められるマスターさえいれば最優にもなれるってことよ。士郎はその通常ありえない前衛タイプのマスター。この二人が組んだら面倒請け合いよ。まあ正体にもよるでしょうけどね。あとはアサシンも厄介ね。あいつがサーヴァントをひきつけてる間にマスターを殺されかねないわ」

ふむと考え込みつつ、その可能性が限りなく低いことをアーチャーは知っている。

十中八九言峰士郎のサーヴァントはセイバーだ。

と考えてふと気づく。

（待て。衛宮士郎が彼女を召喚できたのは、身の内にある鞘のおか

げだ。さて、言峰綺礼の養子たる言峰士郎がそれを持っているのか？)

鞘は衛宮切嗣が衛宮士郎を助けるために彼の身の内に埋め込んだものだ。

(いや、あの時は瀕死の重傷の治療のために埋め込んだのだから、今ここに言峰士郎として存在しているということは、鞘を使った可能性が高い。となればやはり彼女か？)

「なるほど。つまり、言峰士郎とやらはサーヴァントとも正面から遣り合って引き付けていられる能力がある、ということか」

「そう言ったでしょ？ ま、ここでこうして議論してたって何が変わるわけでもないんだけどね。結局はあいつがどんなサーヴァントを召喚したか分からないと対策立てようがないし」

「確かにな」

冷め切ってしまった紅茶を飲み干しカップを戻すと、凜は徐に立ち上がった。

「さて、出かけるわよ。アーチャー。とりあえず地形の把握してもらわないとね」

「ふむ。だがそろそろ夕方だぞ？」

話し込んでいたために、すっかり時間がたっている。

「分かってるわ。別に街を案内するわけじゃないもの。貴方、弓兵って言うくらいだから目はいいんでしょう？ 高いところから一望すれば、ある程度は把握できるんじゃない？」

「なるほど。確かにそれならば可能だな」

「戦場視察兼、軽い偵察つて所ね。ところでアーチャー、姿を見えなくすることってできる？」

さすがにサーヴァントをそのままの姿で連れ歩くつもりはない。かといって、男と歩いているところを知り合いにでも見られたら、後々何を言われるか分かったものではない。

つまりは姿が見えなければいいのだ。

「ふむ。霊体化すれば問題なかつ。魔力供給を切ってもらえばいい」

「ああ、なるほどね。その状態で会話とかは？」

「凜との間にはパスが通じているからな。それを通して会話ならば可能だ」

「なら問題ないわね。行くわよ」

一人でさっさと出て行ってしまった凜の後姿を見遣りながら、やれやれとばかりに肩を竦めてその後を追う。

瞬時に霊体化して凜の後ろに付く。

玄関を開ける前に自分のサーヴァントを確認するように後ろを見遣る。

そして小さく「よし」と呟いて、凜は玄関を開いた。

所々かなり捏造入ってます。

遠坂家の台所は居間の隣です。今で言うダイニングキッチン？ ということになってます。

メインは凜と見せかけてアーチャーでした。

アーチャーの内心を入れると長くなる長くなる。しかも中途半端だし。問題棚上げだし。

さて次話ですが、まだちょっと凜&アーチャーサイドが続きます。多分。

2月1日 ? / Encounter only of voice . (前書き)

遅くなっていました。

予告どおり、今回もまたメインは凜&アーチャーです。

「さてマスター。夕食はどうする？」

偵察などを終えて戻ってくるなり、アーチャーが声をかけた。

「どうって、これから作るけど？ 何？ アーチャーが作ってくれるの？ だとしたら結構嬉しいわよ？」

コートを脱ぎながら、後ろに立つ男を見遣る。

「ふむ。ならば腕を振るうでしょう」

「あら、いいの？ だったらお願いするわ。あ、出来ればその前に紅茶、淹れてくれる？」

「体も冷えているだろうしな。そうしよう」

凜の要望に頷くと、凜の横をすり抜けて台所へと入っていった。どこから取り出したのか、朝と同じ赤いエプロンを手にして。

そうして用意された夕食は、昼とは打って変わって洋食メニューだった。

「アーチャーってば、和食だけじゃなかったのね」

「ふむ。とりあえずメジャーなものならば、それなりに作れるぞ」

へえと感心しながら、テーブルに並べられた料理を見遣る。
クリームシチューにライスとグリーンサラダ。
寒い季節にはうってつけのメニューである。

「早速頂くわ。……あ、おいしい」

シチューを一口食べ、思わずといった様子で凧が呟く。

「ふむ。それならば重畳」

凧の反応を見て、アーチャーは満足とばかりに頷いた。

食後の紅茶を飲み終え、昨日の今日だからと早めに休むことにした凧は、風呂に入るために席を立った。

と、それを見計らったかのように、居間の一角に置かれていた電話が鳴り響く。

凧は電話機をちらりと一瞥すると、取る素振りすら見せずにそのまま無視した。

「凧。電話が鳴っているが？」

見かねたアーチャーが声をかける。

「ああ、いいの。そのうち留守電に変わるから」

「居留守を使う気かね？」

その答えに眉を寄せ、じろりと凜を睨む。

「いやじゃない別に。留守電にメッセージ入れられるんだし、大事な用事ならこつちからかければいいのよ。それに、こんな時間に電話かけてくる奴なんて、どうせその辺知ってる奴ばかりなんだから別に平気よ」

そもそも、遠坂家に電話をかけてくる人間は少ない。

凜自身の交友関係は狭く浅く。家にまで電話をかけてくるほど仲のいい友人などほとんどいないし、夜も九時を過ぎた時間には普通、一般的な用事の電話はかけなくてこないだろう。

そこで流せばいいものを、彼女のサーヴァントは斜め上に行く行動を取った。

「何が平気だ。それでは相手に対して失礼だろう」

そういうと、凜の返事も聞かずにそのまま受話器を取り上げた。

「あ、ちよっと!」

「もしもし、遠坂だが」

（知り合いからの電話だった場合、いきなり電話に出たあんたのことをどうやって説明しろっていうのよっ、バカアチャー!）

『……』

受話器を取って名乗ったものの、電話口からは返事が返ってこな

い。

「？　もしもし？」

『驚いたな。まさか電話が取られるとは思ってもいなかった』

訝しげに今一度声をかけると、電話口から男の声が聞こえた。
どうやら向こう側も凜が電話を取らないことを前提に電話をしてきたようだ。

「なるほど？　確かに凜の言った通りのようだ」

『まあ何を言ったか想像できるがな。おい、スピーカーに変えられるか？』

「ふむ。……変えたぞ」

呆れたように溜息を吐く電話口に声に従い、一つ頷いてアーチャ―はスピーカーボタンを押す。

『おい凜。お前サーヴァントに電話取らせるなんて何考えてやがる』

「違うわよ！　そいつが勝手に電話取ったの！　私はいって言ったわよっ！」

どうも凜が命令して電話を取らせたと考えたようだ。
濡れ衣に凜も怒鳴る。

『そうなのか？　サーヴァント』

凜の言葉が信じられないのか、取った相手に確認を取る。

「ふむ。確かに留守電に変わるから放っておけとは言われたな」

「なのに相手に失礼だからとか言って勝手に取ったのよ！」

（聖杯戦争の間しかいないのに勝手なことするんじゃないわよつ。
あんたがいなくなった後、私が苦勞するでしょっ！）

今回は相手が知己の相手であり、かつサーヴァントのことも分かる相手だったから良かったようなものの、もしこれが一般人の、それも友人などだったらと思うと、想像だけで顔が引き攣りる。

幸い電話機の前に陣取ったアーチャーは凜を見ていなかったため、彼に気づかれることはなかったが。

『サーヴァントの癖に大したお人好しだな』

「む」

受話器の無効で相手が呆れではなく嘲笑を滲ませて笑う。

それに反応しかけたアーチャーだったが、何か言う前に凜に先を防がれた。

「それより士郎！ 何の用よ！」

『ああ。完璧人間の猫を被っているどっかの誰かさんが、珍しく学校を無断欠席したからな。まあ理由は分かるが、完璧人間目指すならちゃんと学校に連絡くらいは入れておけよ』

溜息混じり言われ、凜は一瞬固まった。

「あ」

完全に忘れていた凜だった。
指摘されて初めて気がつき青褪める。

「していなかったのかね？」

アーチャーも呆れたように凜を見遣る。

「だ、だって……っ！」

昨日の今日で、すっかりさっぱり『学校』という単語が頭から飛んでいた。

ますます凜の顔が青褪める。

何しろ遠坂凜は、大変気を使って外面を取り繕っている。

家の中や親しい友人の前でならともかく、大多数の人間の前では特大の猫を何匹も引っ被っているのだ。

その成果もあって、通っている高校では『完璧人間』とも言われている。

そんな中、学校に連絡も入れずの無断欠勤はとてもまずい。

起きた時間的に始業時間に間に合わないのはともかく、せめて遅くとも連絡さえ入れておけばまた違ったのだらうが。

これが一般生徒の場合『サボリ』と方程式が組まれるところだらうが、凜は学校では優等生で通っている。学校関係者なら、『遠坂凜が休み』『サボリ』なんて考えないだらう。

むしろこの場合、何か事件に巻き込まれたとか、もっとまずい方向に行く可能性が高い。

だがまあ、もし仮に凜が無断欠席をしていた場合、すぐに教師か

ら連絡が来ただろう。

特に凜の場合、一人暮らしをしているということは学校側とて知っているのだし。

それが来ていないということは……。

『まあ学校側には俺のほうから適当に言っておいたがな』

つまりはそういうことだ。

「うっ。ありがとう」

言葉に詰まりながらも、小さな声で礼を述べる。

『どういたしまして。どうにかしろよ、そのうっかり』

「し、仕方ないじゃない。気をつけてどうこうできるものじゃないんだから！」

（気をつけてどうにかなるならとつくになってるわよっ！）

伝家の宝刀。遠坂の遺伝子に染み付いた呪い。

彼女自身、こればかりはどうにかしたいと昔から常々思っていたのだ。

小さい頃から『うっかり時間（あるいは日にちや曜日）を間違えて大失態』『うっかりとても大事なものを置き忘れて大損失』など。失敗談には事欠かない。

どうにか治したいと思っても、何をどうすれば治せるのか見当も付かない。

よってそのまま放置状態となっている。

『はあ。おいサーヴァント。お前も気をつけるよ?』

「む?」

溜息混じりに呼びかけられて、アーチャーも何だとばかりに電話機を睨む。

『凜はここぞという大一番に限ってうつかりミスをやらかすからな。まあ凜も言ったように気をつけてどここうできるものでもないからどうしようもないんだがな』

「ふむ。私の召喚場所がおかしかったのもそのせいかな?」

しばし思い返してみても、もしやと口にしてみる。

『なんだ。もう被害にあったのか?』

「そうなのは知らんが、私が召喚されたのは遠坂邸上空だったからな」

『は?』

理解が及ばなかったのか、電話の向こうで素っ頓狂な声上がる。

（ふむ。今思い出してもアレはないだろうと思う。あの状態で私にどうしろというのだ）

「召喚されてそのまま遠坂邸にまっ逆さまに突っ込んだのだよ」

『……サーヴァントとはいえ、よく無事だったな』

むしろ『何で無事なんだ？』とでも聞いてきそうな雰囲気だ。

「私もそう思う。やれと言われてももう二度とやりたくはないがなふざけたように肩を竦めるアーチャーだが、その表情は言外に厳しい。」

『召喚直後にサーヴァント殺しかけるマスターっていいのか？』

「しょうがないじゃない！ 時計が一時進んでるの忘れてたのよ！」

「……おい凜」

僅かの沈黙の後、一段と低い声が電話が漏れる。

「分かってるわよ！ 私のうっかりよ！ でも仕方ないじゃないっ！ 忘れてたんだからっ！」

電話口から次の言葉が漏れる前に、凜が逆切れして喚いた。

凜の経験上、ここで遮っておかないと手痛い精神攻撃という名の嫌味が突き刺さる。

「……場所とはかく、それでよく召喚できたな。余程相性がいいのか、運がいいんのか」

一つ盛大に溜息をつく。

呆れ混じりながらも、後半はむしろ感心したような響きがあった。

「それで！？ 用事はそれだけ！？」

『こっからが本題だ。お前、親父にサーヴァント召喚の報告、したか？』

もし用件がそれだけならさっさと電話を切ってやるとばかりに電話機の傍まで来た凜だったが、続いた言葉にぴたりと動きを止めた。

「……まだよ」

別にサーヴァントを召喚したら教会に届け出る義務があるわけでもないが、一応相手は聖杯戦争の監督役。始まりの御三家の一角を担うものとして、その辺りの義理は通しておきたい。

何より曲りなりにはいえ後見人でもあるし、色々知っている（むしろ知り過ぎている）間柄なだけに気が引ける。

とはいえ、進んで会いたくもなければ出来れば会話も避けたい。

『だろうな。俺から言っておくのと、自分で教会まで行くのと、どっちがいい？』

「よろしく」

『即答かよ』

嫌そうな声音とは裏腹に、そうくるだろうと予想してたのだろう、それ以上は何も言わなかった。

「いいじゃない別に」

『別にいいけどな。まあどちらにしろ、これで全てのマスターとサ

ーヴァントが出揃ったわけだ』

「なっ!?!」

次いで電話口から流れてきた言葉に、凜ばかりかアーチャーすら絶句する。

『ようこそ、聖杯戦争へ。さあ、殺し合いの始まりだ』

それだけ言って電話は切られた。

凜もアーチャーも、言われた言葉を反復して言葉を失っている。アーチャーは別の意味でも言葉を失っていたが。

（聖杯戦争の始まりか。それは兎も角として、アレが言峰士郎、かなるほど。確かに違うのだな。）

アーチャーはそれ以上に衛宮士郎と言峰士郎の違いを見せつけられて半ば呆然としていた。

（だが凜が警戒するだけはある。育ての親でこつも違うものか）

凜との会話を聞く限り、主導権を握っていたのは常に向こうだ。

衛宮士郎では遠坂凜相手に主導権を握るなんて出来まい。

だが育ての親がああ神父であると思ひ出し、それならば逆に納得できることもあった。

（ふむ。考えないようにしていたが、いざ目の前に突きつけられるとやはりクるものがあるな。これでは直接相対するときにはどうなることやら）

そうして数秒か数十秒か。

暫くの間がたってから、ぼつりと凜が呟いた。

「今、出揃ったって言ったわよね？」

「ああ、言っていたな」

確認するように声に出してみる。

「ってことは、あいつも召喚したってことね」

「というか凜。何故彼は全て出揃ったことを知っているのかね？」

「え？」

言われてみればそうだ。

いくら魔術師、マスターといえど、いつサーヴァントが召喚され
たかなどは知りようがない。

冬木市全域を魔術的に監視しているならともかく、近くにでもない限り察知できない。

電話の主――言峰士郎の魔力量を鑑みればそれも不可能ではないこ
とは分かるが、遠坂邸にはそういった魔術的な監視の目を遮る結界
が張ってあるし、他のマスターとてそういった措置の取られている
ところで儀式は行っているはずだ。

特にサーヴァント召喚なんて神経を使って警戒しているだろう。
後考えられるとすれば聖杯戦争の監督役くらいだが、確かに彼は
監督役の息子だが、監督役とていつ召喚されたのかは分からないは
ずだ。

彼が知っている理由、それは……。
彼が――の――を――と――いるから。

だが彼女たちは知らない。
いずれは知ることになるだろうが、今はまだ。

通話を切った二つ折り式の携帯電話を閉じると、脇に置かれていた煙草を一本銜え火をつける。

「さて、聖杯戦争の始まりだ」

部屋の外に目をやり、暗闇に浮かぶ月を眺める。
ふとして再び携帯電話を開くと、今度はメールを打ち始めた。

【聖杯戦争開始 計画実行】

それだけを打ち込むと、二つのアドレスにそれぞれメールを送信した。

それを眺めながら、煙草を一口。

二口目を吸おうと口をつけたところで、携帯電話がメールの着信を伝えた。

一件受信して、直後にもう一件。

最初の受信メールは【了解】と一言。

二件目のメールも似たようなもので、【分かりました】とこちら
も一言。

二つのメールを見終えると、にやりと薄く笑みを浮かべて紫煙を吐き出した。

「アリア。明日からあの二人がウチに来る」

笑みを浮かべたまま、対面でドラ焼きを頬張っている相方に声をかける。

「やれやれ。面倒だな」

小さく肩を竦め、彼女もまた笑う。

「そう言っな」

「分かっている。明日から忙しくなるな」

「ふむ。平和な時は終わりか」

煙を吸い込み、嘆息と共に紫煙を吐き出すと、彼女は声を上げて笑い始めた。

「はははははっ。何を言っている。今までとて平穩とは言えぬ日々だったではないか」

「ふむ。それもそうだな」

二人が出会って十年。

その大半が修行と闘争の日々だった。

死に掛けたことも一度や二度のことではない。

最も、二人の出会いが一番酷かったが。

「さて、綺礼は綺礼で動くだろうし、ギルもいる。凜は兎も角として、あのクソ蟲も動くだろうし。この戦争、どうなるだろうな？」

揺蕩う紫煙を眺めながらこれから始まるだろう先を想う。

「どうなるうとも、我は土郎と共にあるだけだ」

氣負うでもなくそうあつて当たり前だとも言つように彼女が笑う。

「ああ、そうだな」

頷き、彼も笑った。

伏字の部分は、分かる人にはわかると思います。

言峰士郎とセイバー・オルタから連想すれば分かると思います。

メールの相手も、その後の士郎の言葉を考えれば、まあ分かりますよね。

この二人、特に彼の方は、この小説内で士郎によって変わり過ぎてしまった人その？です。その？？まではアリア+教会組です。ある意味原作からの変化度合いは一番かもしれません。

この二人に関しては、次話で出てくるのでその時に。

ちなみに士郎は父親のことを、外では親父、家や家族だけの時は綺礼と使い分けています。

それではまた次話で。

2月2日 / Accomplices . (前書き)

大変遅くなってしまつて申し訳ありません。

前半は相変わらず凜&アーチャーが出張ってますが、後半は原作と
はずいぶんと変わった人たちの登場です。

2月2日 / Accomplices .

一人、屋上で弁当を広げていた土郎は、近づいてくる気配を察知しドアへと視線を向けた。

「やっと見つけた」

開けたドアから顔を覗かせたのは遠坂凜。

土郎の姿を認めると、溜息をついて呟いた。

「何の用だ、凜」

「何って決まってるでしょ、聖杯戦争のことよ」

そっけない土郎の言葉に、凜はもう一度溜息を付いて彼のすぐ傍まで歩を進めた。

いくら屋上に人が来るような時期ではないとはいえ、昼日中のこんな場所で話題にしている話ではないが、凜は特に気にした様子もない。

「言っておくがここでやる気はないぞ」

「当たり前でしょ！ 私だってここでどうこうする気はないわよ」

凜をちらりと横目で見つっ、弁当箱から玉子焼きを頬張る。

＜凜、相手はどうやらサーヴァントを連れていないようだぞ＞

「え？ そうなの？」

「なんだ？」

アーチャーが凜に話しかけるが、当然ながらその声は土郎には聞

こえない。

訝しげに凜を見遣れば、当の本人はじとりと半眼で士郎を睨んだ。

「あんたサーヴァントつれてないって本気？」

いくら聖杯戦争の本領は夜とはいえ、昼だから何もないとはいえない。

当然ながら凜はいつだろうとどこだろうとサーヴァント連れである。というか、余程の事情でもない限り、それが当然ともいえる。

「む。ああ、お前のサーヴァントか。サーヴァント同士は霊体化していてもある程度は知覚できるんだったな。それがどうした？」

いくらマスターだとはいえ、霊体化している他のサーヴァントの姿は見えない。

だがサーヴァント同士ならば、霊体化していても気配は分かるということを思い出し、凜の言葉の意味を知る。

「どうしたって、聖杯戦争はもう始まつてるのよ？ あんたが昨日言っただんじやない。なのにサーヴァントも連れずに外に出るなんて何考えてるのよ」

凜自身は士郎がどんな人間でどれほどの戦闘能力があるのか知っている。たとえ今彼女が仕掛けたとしても、時間を稼がれサーヴァントを召喚されるのがオチだと理解している。

だが他のマスターもそうとは限らない。

マスターがサーヴァントも連れずにうろつろしていたら好機と見て仕掛けてくる者もいるだろうし、いくら士郎の能力が高いからとはいえ、英霊相手ではもしもということがないとも言い切れない。

苛立ち交じりの彼女の言葉に、士郎は小さく笑った。

「敵の心配か？」

「違うわよ！ あんたは私が倒すんだから、他の奴らなんかにやられるなんて許せないの！」

「なら聞くが、何故俺が他のマスターやらサーヴァントやらに襲撃されることが前提になってるんだ？」

これ見よがしに溜息をついて、呆れたように凜を見遣る。

「何でって、聖杯戦争なんだからマスターを狙うのは当たり前ですよ。それがサーヴァントも連れていないとしたらなおさらよ！」

士郎に視線を向けられて一瞬詰まる。

凜としてはそんなことを言う士郎が信じられなかった。

彼女は相手がどれくらいの力量を持っているのかよく知っているし、知識面でも凜と同等かそれ以上。常に冷静で先をも見据え、自身を上回るということを渋々ながら認めるほどの相手だ。

それがこんな聖杯戦争の基本も基本のことで躓かれては、認めた彼女のプライドが許さない。

「だから。元々俺を知ってるお前ならまだしも、他のマスターやらサーヴァントが俺をマスターだと知っているはずがないだろうが」

確かにそれもそうだが、そんなもの魔力を探れば一発だ。

今この地にいる魔術師ならば、それがマスターであるといコールで結んでも差し障りがないだろう。

何しろ普段のこの地と来たら、魔力を持つものは僅かに5人しかないのだから。

しかも言峰士郎の魔力量と来たら、この街でも随一だ。

順当に考えて、疑われないわけがない。

「あのねえ。アンタの魔力でマスターじゃないなんてありえないでしょ」

米神を押さえつつ、そのことを指摘する。

勿論魔術師の魔力量とマスターかどうかに関連性などないのだが、今の状況では強い魔術師は真っ先に疑われるのだ。

「……それはうっかりなのか？ それとも単にお前が馬鹿なだけか？」

凜の言葉に、土郎は眉を顰めた。

暫く逡巡した後、疑うような胡乱な目で凜を睨む。

「なっ！ 誰が馬鹿よ！」

突然馬鹿呼ばわりされて声を荒げる。

＜凜、サーヴァント云々以前に、目の前の相手から魔力を感じないのだが？＞

反論しようと口を開きかけたところで、背後から声をかけられて一瞬固まる。

そして小さく首を傾げて土郎を凝視すると、自分の目が、感覚が信じられずに瞬きを繰り返した。

「は？ そんなわけ……え？ あれ？ なんで？ ちょっと土郎！ あんた魔力どうしたのよ！」

『ありえない』とばかりに目を見開き、震えながら士郎を指差した。

今の今まで気づかなかったが、士郎からは片鱗たりとも魔力を感じなかったのだ。

彼女の魔力を上回る量を誇っていたはずの士郎から、欠片たりとも。

これでは誰がどう見たところで一般人だ。

「今頃気づくか？ いや、サーヴァントにでも指摘されたな？」

盛大な溜息を吐きつつも、凜らしからぬ素早さから見当をつける。

「ぐっ！ いいから答えなさいよ！」

指摘され詰まった凜だったが、苛立たしげに先を促した。

「なんで敵であるお前に教えなきゃなんないんだ」

「うっ」

ちらりと一瞥すれば、凜は気まずそうに目を逸らした。

「まあお前は俺がマスターだと知っているから隠しても仕方がないしな。魔力殺しだ」

それを横目で見やって小さく唇の端を持ち上げると、これ見よがしに肩を竦めた。

「魔力殺しですって？ あんたそんなもの持ってたの？」

「正確には作った、だな」

「……あんたの魔術礼装ね？」

「ああ」

言峰士郎は使える魔術が極端に少ない。

満足に行使できるものならば片手で足りるし、習得している魔術は他にもあるが、どれもこれもやたらと効率が悪い。

つまりは極々一部を除いて、彼には魔術の才能が絶無だった。

当然ながら使える魔術は出来うる限り伸ばしてきたが、様々な場面で自身の魔術の才能のなさを悔やんだ。

そんな彼が不得手な部分を何とか補おうと作り出したのが魔術礼装だった。

正確には、特定の魔術を行使するための限定魔術礼装だ。

結界を張るものや治療用など多種に及ぶ。

当然ながら魔力殺しの効力を持つものもその中に含まれていた。

凜はその全てを知るわけではないが、いくつかは見せてもらったことがあった。

魔力殺しを持っていること自体はいい。なんら不思議はない。

今ここで彼女が疑問を持っているのは、何故今この時に、そんなものを身につけているのか、だった。

「なんだってそんなことしてるのよ」

「俺を知っているやつなら兎も角、普通はマスター＝魔術師、つまりは魔力を持つてる奴を疑うだろうが。魔力がないなら疑いの目も欺けるからな」

素直に疑問をぶつけてみれば、彼は小さく肩を竦めて言った。

「まさかあんた、聖杯戦争に参加する気はないっていうの？」

その答えに、じろりと士郎を睨む。

「それこそまさかだ。こつちから仕掛けるなら兎も角、襲われたら面倒だろうが。後始末には親父の手を煩わせるしな」

「あー。はいはい。あんた、ホント家族好きね。あんなのどこがいいんだか」

士郎の父親、凜にとっては後見人となる神父の顔を思い浮かべて、げんなりとする。

凜の父親の弟子に当たる人物で、彼女にとっても兄弟子に当たる男だが、どうにも苦手な人物だった。

裏腹に、士郎は彼をとても大事に思っている事は知っている。

正確には彼だけではなく、言葉の通り『家族』がだったが。

士郎の家族は、凜が知る限り三人いる。

一人は当然父親たる言峰綺礼。

もう一人は学校にいるとき以外は常に彼と行動を共にしている女性、というより女の子。

最後の一人は彼女は会った事はなかったが、時たま彼らの会話で話題が上る男。

最後の一人は兎も角として、士郎の家族は凜にとって苦手な相手ばかりだった。

言峰綺礼は勿論、士郎と常に共にいる娘は、凜とは犬猿の間柄だ。遭遇すれば、必ずといっていいほどの確率で嫌味合戦が始まる。

それは兎も角。

彼は時々、家族以外はどうでもいいと思っっているのではないだろうかと思うような事を言う時がある。

それも、苦手の原因の一つかもしれない。

「お前のことも家族の次くらいには好きだぞ？」

変なことを考えていた自分に内心で舌打ちをしたところで、突然士郎の口からそんな言葉が飛び出した。

「なっ！ 何言い出すのよ、突然っ！」

「別に？ 事実を言っただけだ」

慌てて怒鳴るが、顔がどんどん赤く染まっていくのをとめられない。

しかし士郎はそんなことはお構いなしに、しれっと言葉を続ける。その口元がややにやけている辺り、彼も凜の状態を分かっているに違いない。

とはいえ、彼の言葉は真実彼の本心からの言葉なのだが。

「ううううっ！」

「唸るな」

何も言い返せずに唸れば、ぴしやりと止められる。

「あんたが唐突に変なこと言い出すからでしょっ！ もういいわよ！」

言い捨てて、彼女はそのまま踵を返した。

ずんずんと足音を響かせ、屋上のドアをこれでもかと力いっぱい叩きつけるようにして去っていった。

「あいつは一体、何をしに来たんだ？」

残された士郎は一人、凜の消えた屋上の扉を見つめたまま溜息をついた。

一方その頃、苛立たしく屋上を後にした凧は、怒りも覚めやらぬまま階段を降りていた。

<凧、君は一体何しに行ったのだ？>

時を同じくして屋上で土郎が呟いている事も知らずに、ほぼ同じ内容をアーチャーは問いかけた。

「あ。しまった。肝心なこと聞き忘れた」

ぴたりと足を止めると、土郎がいるだろう辺りを一瞥して溜息をついた。

それを背後で見遣りながら、アーチャーも肩を竦める。

「何を聞くつもりだったのかね？」

「昨日話した、マスターの心当たりのもう一人が、今日学校休んでるのよ。それで、あいつ何か聞いてないかと思ってね」

「ふむ（その心当たりのもう一人とやらは十中八九彼女だろうが、この世界ではヤツと彼女に接点があるのか？）」

暫し考える。

そもそも凧の心当たりだろう彼女との接点となった出来事が、ここでも起こっていたかは知りようがない。

凧に聞こうにも、あの出来事に関しては彼女はまったく無関係であるから、聞いたところで分からないし、第一どう聞けというのか。

「親しい人物なのかね？」

僅かに悩んだ挙句、一番無難に話題を振ってみた。

「まあそうね。その心当たりの兄が士郎の友人なのよ。その関係でそれなりに仲がいいって聞いているわ」

「なるほど（ああ、ワカメ経由か）」

接点となった出来事は兎も角、繋がりには理解できた。

尤も、彼の覚え方もどうかと思うが。

「ま。とりあえずいいわ。もしかしたら単なる偶然かもしれないし、明日も休むようならそのときまた考えましょ」

この話はこれで終わりとはかりに、立ち止まっていた凜が歩き出す。

その後を付いていきながら、ふとアーチャーは首をかしげた。
果たして『あるとき』は彼女は休みだっただろうか、と。

茜差す夕暮れ。

授業が終わると同時に学校を後にした士郎は、寄り道もせずに真っ直ぐ自宅へと帰ってきていた。

基本的に彼は放課後学校に残ることはない。

稀に大会限定で助っ人として参加している弓道部に寄る事もあるが、それ以外は今時の高校生らしくらず真っ直ぐに自宅へと帰る。

特に今日は朝から客が来ていた。

士郎にしてみれば、別段客をもてなすためだとか、客に気を使つてのことではなく、客がいることで不機嫌になっっているだろう相棒

を心配してのことだった。

十年前からの相棒にして第五次聖杯戦争における士郎のサーヴァント。

それが彼女、アルトリア。普段士郎はアリアと略して呼んでいる。彼女は士郎に対しては滅法甘い、それ以外に対しては果てしなく暴君だった。

今いる客はそれなりに彼女とも知己だが、だからと対応が甘くなることもない。

気に入らないことでもしようものなら、問答無用で死刑執行くらいは普通にする。

とはいえ彼女の興味の対象は、士郎と士郎の作る料理と大江戸屋の大判焼きとどら焼きくらいだったから、それにさえ気をつけていればとりあえず死ぬことはない。

尤も、常日頃から暴君であるから、死ぬことはなくともそれなりの被害は被るが。

武家屋敷たる自宅の玄関扉を開ければ、士郎が近いことを察知していた相棒が仁王立ちしていた。

「ただいま」

「うむ」

帰宅の挨拶をすれば、彼女は満足そうに頷いた。

連れ立って居間へ入れば、二人の人物が彼らを出迎えた。

「お帰りなさい、先輩。すぐにお茶入れますね」

そう言って立ち上がった彼女は間桐桜。

士郎と同じ高校に通う後輩で、凜の心当たりたる魔術師でもある。

「先に着替えて来いよ」

テーブルに古めかしい本を広げて読みふけていた彼は間桐慎二。士郎のクラスメートにして桜の兄である。

彼ら二人が朝から言峰邸を訪れていた客であった。

制服から私服に着替えて居間へと士郎が戻ってくると、丁度お茶の準備が整ったようだった。

既に士郎以外は腰を下ろして湯飲みを傾けている。

それぞれの席には、昨日の夜に作り置きしておいた士郎手製の羊羹が三切れ載った皿が三枚。アルトリアの前に置かれた皿だけ大皿で、およそ一本分はあるだろう羊羹が載っていた。入ってすぐのところに慎二が。その右脇の一番台所に近い席に桜が。

桜の対面が空席となっており、その空席の横―慎二の正面―に士郎の相棒たる彼女が腰を下ろしていた。

当然ながら、空席となっている席につく。

腰を下ろすのとほぼ同時に、緑茶の入った湯飲みが眼前のテーブルにことりと置かれた。

「学校はどうでした？ 何か聞かれたりしませんでした？」

「お前たちが休んでるのと俺に関係があるとは誰も思わんだろう。」

ああ、そういえば昼に凜が来たが、あれはもしかしてそれを聞きに来たのか？」

桜に聞かれて、昼休みに自分のところへやってきた凜を思い出す。

「遠坂、ね。聖杯戦争早々に間桐の人間が休んでれば、そりゃあマスターの一人としては気になるだろうね」

茶を啜りつつ慎二が肩を竦める。

「冬木在住の魔術師は『遠坂』と『間桐』と『言峰』だけですから。自分が知らないならもう一方に聞くしかないですもんね」

につこりと微笑む桜だが、言葉には妙に棘が含まれているように聞こえる。

「はつ。聞いたところで士郎が素直に答えてくれんことくらい、十年の付き合いで分かりそうなものだがな。つくづく奴は学習せんな」

鼻で笑いつつ、大量に載せられた羊羹の一切れに噛り付く。

「ああ、そういえばまだ紹介してませんでしたね。ライダー」

お茶を啜っていた桜がぼんと手を打ち、背後に声をかけた。

途端、桜のすぐ後ろから紫色の髪をして目隠しをした長身の女が現れる。

「お前のサーヴァントだな？」

「ええ。彼女が私のサーヴァントでライダーです。ライダー。兄さんの親友で、こちらのアルトリアさんのマスターの言峰士郎先輩よ」

突然現れた相手に驚くこともなく一瞥する。

桜が紹介するが、ライダーは困惑気味に桜と士郎とを交互に見遣っている。

彼女にしてみれば致し方ない。

マスターに連れられてやってきた屋敷には、自身と同じだが少し異なるサーヴァントと親しげに挨拶を交わし、学校へ行くというそのサーヴァントのマスターを穏やかに見送り、その後は戦闘をするでもなく桜も慎二も寛いでいる。

何故マスターと戦わないのか。

何故サーヴァントと戦わないのか。

彼らは敵ではないのか。

朝からそればかりをぐるぐると考え続けていたのだ。

「いいのですか、サクラ」

「ええ。だって言峰先輩は、私たちの共犯者だもの」

訝しげに問いかけるライダーに、桜はことさらにつこりと笑顔を向けた。

「ふむ。そうだな」

「『妖怪蟲爺をブッ血kīーって平穩な間桐家を再興しようの会』の副会長だからね。まあ会員は僕たち三人だけだけど」

桜の答えに士郎が同意し、慎二も苦笑しながら頷いた。

『妖怪蟲爺をブッ血kīーって平穩な間桐家を再興しようの会』とはその名の通り、マキリ・ゾオルケンを倒して平穩を取り戻すことを目的とした会である。

会長間桐慎二、副会長言峰士郎、平会員間桐桜。

数年前に発足した、わずか三人だけの活動だが、今の所三人にとって最優先事項である。

発足当時から次の聖杯戦争の時に計画を実行しようと決めており、つい先日無事計画発動と相成った。

聖杯戦争まで計画実行を待ったのは、マキリ・ゾオルケンを聖杯戦争のごたごたにまぎれて始末してしまおうと考えてのことである。

「そうなのですか？　ですが、所詮他人同士でしょう？　信用してもいいのですか？」

「ふむ。まあそうだがな。俺にとっては、妖怪爺や聖杯なんぞよりも、二人の方がよほど大事だからな」

不思議そうに訊ねるライダーに、士郎は至極あっさりと答えた。

「あなたは聖杯戦争に参加しているマスターでありながら、聖杯を望んでいないのですか？」

聖杯戦争に参加している者の目的は例外なく聖杯だ。

それはマスターだろうとサーヴァントだろうと変わらない。

それが一般見識である。

かく言うライダーも、叶えたい望みがあつてサーヴァントとして参加しているのだ。

そんな中、一マスターでありながら聖杯を『なんぞ』扱いする士郎が心底信じられなかった。

「いらん。そもそもだ、あの泥に汚染されたモノなんぞ、あるだけ害悪だ。第一、アレではどんな願いをしたところで、破壊でしかその望みを果たせないものだぞ？」

「なっ！？　どういうことですか！？」

断言した士郎の続く言葉で、ライダーは絶句した。

聖杯とはその名の通り、聖なる杯であるはずだ。

神聖あるいは無色の力の結晶であるはずの聖杯が、害悪とは。

「言葉の通りだ。第三次聖杯戦争でアインツベルンによって召喚されたアヴェンジャーによって、聖杯は汚染されている。あんなもの

完成させたところで、破滅しか齎さん」

表情も変えずに淡々とただ説明が続く。

ライダーは呆然とし、そこで初めて彼の言葉に誰も異を唱えないことに気づいた。

「サクラ！ サクラはそのことを知っていたのですか！？」

聖杯が害悪に汚染されているという事実だけでも驚愕であるが、そのことをここに集まる四人は既に知っていたということを知り、ライダーは知らず拳を握り締めた。

「ええ。その聖杯の欠片を埋め込まれて間桐の聖杯にされたのが私だもの」

そして続いた桜の言葉に、一気に血の気が失せた。

「もつとも、最後の詰め段階でなされていないから、正確にはそのなりかけね。それでね、その最後の詰め段階を留めてくれたのが言峰先輩なの」

隠されているマスクの下で、驚きに目を見張る。

「俺たち兄妹にとっては、まあ恩人のようなものだな」

慎二が肩を竦める。

口調は軽いが、よく見れば存外強い力で湯飲みを握り締めていることが一目で分かるほどに、その手は白かった。

「俺は壊されると分かっている友人を放って置くつもりなど更々な

いからな」

士郎も軽い口調で肩を竦めた。

桜に視線をやれば、見ていることに気づいた桜が振り返る。

そしてにこりと微笑んだ。

小さく、満面ともいえない笑みだったが、儚く、そして何より綺麗な笑みだった。

それを見て、ライダーは決心する。

「……分かりました。サクラたちの恩人というのなら、これ以上疑うのは失礼と言うものです。信用します」

今まで握り締めていた拳を解いて、決意も新たに再び強く握り締める。

「ふむ。ならば重畳。さて、信用を得られた所で今後の話だ」

「ああ。とりあえず俺たち三人、暫くの間厄介になる」

「家に戻らないのですか？」

ライダーが驚く。

てつきり今日は何らかの用事があって訪ねてきただけだと思っていた。

「さつきも言っただろ。僕たちは最終的にウチの妖怪爺をブチ殺すのが目的なんだ。敵の巣穴に戻ってどうするのさ」

「それに私の問題もありますから」

呆れたように肩を竦める慎二に、桜も頷きながら続けた。

「サクラの？」

「私の心臓にね、お爺様の蟲がいるの」
「なっ！」

これ以上驚くことはないだろうと思ってたライダーにとって、今日一番の爆弾だった。

心臓に蟲がいると桜は言った。
つまり、寄生しているということだ。

「今は言峰先輩の結界の中にいるから話がお爺様に伝わることはないけれど、外に、特に家に戻ったりしたら、最悪心臓を食い破られる」

桜が不安げに、洋服の上から左胸を握り締めた。

「とりあえず対策だ」

そういうと、土郎は投影魔術で二つの物を投影して桜の前に置く。

「指輪と、ネックレス？」

桜の目の前に置かれたのは、その言葉どおり指輪とネックレスだった。

指輪の方はシンプルなシルバーの指輪で、小さい剣型のチャームが付いている細身のもの。

ネックレスの方は同じくシルバーで、三センチほどの大きさの剣を模した十字架がトップについているもの。

どちらもシンプルながらも女性らしいデザインで、桜がつけていてもそれほど不自然ではない。

もっとも、桜自身、普段からアクセサリーの類は身につけていないので、友人や知り合いなどが見たら多少違和感を覚えるかもしれない。

ないが。

「魔術礼装だ。ネックレスの方の効力は『魔術回路の強制停止』。強制的に装着者の魔術回路を停止状態にさせる。これをつけた状態では魔力の生成・魔術の発動は一切不可能だ」
「それだけでも十分じゃないのか？」

眉を寄せる慎二に、士郎は大きく首を振った。

「これだけだと外部から魔力を取り入れることが可能だ。つまり、外部から魔力という形で発動指令を受け取ってしまえば、その次点でアウトなんだよ」

「それを補うために二つあるんですね？」

「そういうことだ指輪の方は『外部から魔力を取り入れること』と『内部の魔力を放出する』ことを禁じるものだ。外部からはさっき言った発動指令対策、内部からは虫の餌供給源のカットといったところか。この二つをつけている限り、虫は、餌を得られず、外部から指令を受け取れない状態となるが、それだけだ。この二つは虫を殺すためでも倒すためのものでもない。あくまでも、活動停止状態にさせておくだけだ」

「つまり、虫を殺す方法は今のところないってことか？」

「そうだ。そして一番重要なのが、これをつけるとライダーへも魔力供給が出来なくなるということだ」

試すように、士郎がライダーを見遣る。

ライダーは一度目を瞑り、再び開いた。

「構いません。それでサクラの安全が買えるのなら」

魔力供給がされなくとも、すぐに消えるわけではない。

元からの魔力もあるし、ライダー自身のスキルとして『単独行動：C』がある。

戦えばその限りではないが、どちらにしろ今すぐどうこうなるものではない。

「で、でも、ライダーはどうするの？」

一切の躊躇なく言い切ったライダーに、桜の方が動揺した。それを見て、士郎と慎二が顔を見合わせ小さく頷きあう。

「ライダー。お前は桜の護衛につけ。それ以外での戦闘行為は一切禁止だ」

「分かりました」

「それで消費を最小限にとどめるか。あとは、地脈の魔力を還元できるように結界をいじるか。それでも足りないようなら俺の魔力を使えばいい。伊達に英霊並みの魔力を備えているわけではないからな」

「はい。その時はよろしく御願います」

慎二からの命令に、ライダーは躊躇わずに頷く。

そして解決策を提示した士郎に対しても、同じように頷いた。

その間当事者たる桜は、何か言おうと小さく口を開けたまま、言葉を発することなくただただ見ているだけしか出来なかった。

「とりあえず桜はこの家から出ないようにし、指輪とネックレスを外さなければほぼ大丈夫だろう。後は妖怪討伐の時期だが」

「あの爺が桜以外に手を用意してないわけがない。が、桜がどうなっているのか知りようがないから、ヤツは多分暫くは様子見で動かないだろうな」

「ふむ。ならば焦れて動き出すまでこちらも様子を見るか。とりあ

えず、数日は俺とアリアで夜に見回りでもするか」
「そうだな。運がよければ得物が掛かるだろう」

アルトリアも加わり桜以外の四人が互いに顔を見合わせ頷きあう。
結局ことは桜が口を挟む余裕もなく、自身のサーヴァントの処遇から今後についてまで、あつという間に決められてしまった。

「さて、大筋も決まったところで夕飯の支度といくか」

湯飲みに残っていたお茶を飲み干して、士郎が立ち上がる。

「おお。夕餉はなんだ？」

こと食事には五月蠅いアルトリアが、わくわくとした面持ちで問いかけると、士郎は僅かに考え込んだ。

「ふむ。寒くなってきたしな。鍋なんてどうだ？」

「うむ」

確かに、この寒い時期にはもってこいの料理といえるだろう。
満足げに頷くアルトリアに頷き返し、士郎は台所へと消えていった。

後続くように、桜もテーブルの上の湯飲みや急須などを盆に載せ立ち上がる。

本の続きを読み始めた慎二に、テレビをつけるアルトリア。

一人ライダーだけがどうしていいか分からずに落ち着かない。

アルトリアは基本的に他人に無頓着だから完全無視。

慎二は本に夢中でそんなライダーに気づいておらず、士郎と桜は夕飯の準備に取り掛かっている。

哀れにもライダーは、夕飯の支度が出来たと食器を運んできた桜

に声をかけられるまで、一人うつろつきよろつきよろと挙動不振を続けていた。

2月2日 / Accomplices . (後書き)

というわけで、間桐兄妹とライダーでした。

ウチの慎二はいい人です。ちゃんとお兄ちゃんしてます。原作の18禁的なことは一切ありませんでした。

刻印虫や桜のこと、魔術礼装なんかはかなり自分設定入ってるので、おかしい部分などもあるかと思いますが、そこはスルーをお願いします。

今回更新が遅くなったのは、その辺の辻褄合わせとかに苦労したのが八割がたの理由です。

さて、間桐兄妹&ライダーですが、作中の話通り、以降最終決戦まで言峰邸から出ません。ついでに言えば、最終決戦まで三人に戦闘シーンありません。

ウチには藤ねえがないので、その代わりのような形で日常的には出てきますが。

今回は初戦闘にはいる、かもしれません。

作者とアーチャーのなぜなに双黒（前書き）

番外編というか、作者の説明不足などで分かりにくいところなんかをちよつと説明というか解説してみよう的な特別篇です。
全編会話オンリーで参ります。

作者とアーチャーのなぜなに双黒

「作者と、」

「アーチャーの（棒読み）」

「「なぜなに双黒！」」

「パクリだろうが」

「きぐるみ着てねーし、おねーさんじゃねーし。よくね？　つーかお前、棒読みすんなよ」

「やかましい。大体なんだ、これは」

「いや、読者様が疑問に思ってるだろうことを勝手に予想してアーチャーに質問してもらおうなコーナー？」

「何故私なんだ」

「だってお前って原作よりも結構覚えてるだろ？　その辺りが読者様の視点に近いんじゃないかなーと思つて。お前の疑問はきつと読者様も疑問に思ってるに違いないと俺が勝手に判断して作ってみた。つーわけで、ホレアーチャー。質問しろ。あ、ちなみに更新が遅い理由とかそういう関係は質問してきても答えねーぞ」

「何故だ。読者が一番気になるところだろうが」

「なんでもですー。もしそこんとこ聞いてきたら衛宮士郎って呼ん

でやる」

「なっ！」

「いい具合にウチに衛宮士郎ってお前しかいないし？ 原作と違って名前が被ることもねーからな」

「卑怯だぞ！」

「何か言ったかなー？ え・み・や・し・ろ・う・くん」

「くっ。分かった。そのことにに関して聞かなければいいのだろうか？」

「物分りがよくて助かるよ。つーわけで気を取り直して質問いってみよー！」

「なぜあの家に言峰士郎が住んでいるのだ？」

「ああ、アレ？ 士郎がまだ中坊の時に、ちよろつと『訓練が出来る広い場所が欲しい』的な事を言ったら、ソレをたまたま聞いてたどこぞの金ぴかが、買って寄越した」

「売りに出ていたのか？」

「そもそもウチの衛宮切嗣は第四次で死んでるだろ？ その後アイツベルンの関係者が、魔術的な痕跡を全部消してから処分したのさ。で、ソレを金ぴかが見つけてきて、完璧リフォームを施して寄越した、と」

「つまりあの魔法陣もないということか」

「さっぱりぷー。完全に普通の武家屋敷だ」

「いつからあそこに住んでいる？」

「高校入学当時からだ。何しろ教会からだ高校遠いからな」

「わざわざそのためだけにそこまでするか？」

「つーか、正確には聖杯戦争のためだな。士郎はマスターになるのが確定してたし、いくら親子つたって、監督役の家にマスターが住んでたら流石にズリイだろ」

「ああ、なるほど」

「今は週に一回二回は飯つくりに戻ってる程度だな」

「わざわざか？」

「綺礼のためつーか、金ぴかのため？ ほら、あの神父、ほつとくとマーボしか食わねえから。金ぴかに、あれは無理。まあ、その金ぴかも士郎が移り住んだのと前後して新都でホテル暮らしだ。なんせ毎食マーボだからな」

「逃げたか」

「嫌、あれは誰だつて逃げるだろ。士郎にくつついていこうとしたらオルタにたたき出されて、仕方なくホテル暮らしを始めたんだよ。で、士郎が教会に飯つくりに行く時だけ教会に顔出してるってわけだ」

「そもそもアレが、素直に人の作る食事を食べるのか？」

「何言つてんだ？ あの金ぴかは、士郎が料理ができると聞いてむせび泣いて喜んだんだぞ？」

「アレが、か？」

「それまで毎日毎食マーボ尽くしの食生活してたからな。綺礼は綺礼で、何であれを嫌がるのか本気で分かってないから悉くマーボ尽くしでさ。普通のマーボなら金ぴかもむせび泣くまで行かないんだろうケド、ほれ、あのマーボは特別製つつーか、アレだろ？ それで、やっとまともな食事ができると感動したんだよ」

「気に入らんのなら出て行けばよからう？」

「一応主従だからな。出て行こうとするたびになぜか綺礼に先回りをして潰されてな。金ぴかも金ぴかで、マーボが嫌だから自分で作るなんて発想は天地がひっくり返ったってしないし。あれも馬鹿正直に出されれば無理にでも食べようとするつつーか、最初は嫌がるんだけどさ、綺礼に嫌味言われてプライド刺激されて維持になつて食べるもんだから一向に改善しねーし。そこに普通の、ホントに普通のご飯が作れるって人間が現れれば救世主扱いしても仕方ねーだろ」

「救世主、なのか」

「お前もマーボ毎食出されて無理やり食わされれば、そうなるさ。まあお前の場合、即効で自分で作るだろうケドな」

「当然だ。食事でふと思い出したが、そういえば虎が出てこないな」

「ウチ、多分今後も虎出てこないと思うぜ？」

「何故だ？」

「虎にとって天敵がいてな」

「虎に？」

「ホレ、士郎大好きなアレがいるだろう？ 士郎と、士郎のつくるご飯が何よりも大好きな暴君がさ。自分の取り分が減ると分かっている食事時にアレが虎を入れると思うのか？」

「ああ（力ない溜息）」

「最初の頃に普通に突撃かまして、オルタに剣でぼっこぼっここのてんぱんにやられた拳句、嫌味毒舌で攻撃されて叩き出されて、見事トラウマつか、苦手なものになってな。ほら、あの家、士郎はともかく、オルタは24時間365日いつでもいるだろ？ 言っちゃ悪いがヒッキーだし。以来寄り付かなくなった。ついでに言えば、学校で士郎にちょっかい出したが、これもまた剣でぼろかすに負かされて以来こっちも苦手認定された」

「あの虎に苦手なものが、な」

「その爺さんとは士郎は仲がいいんだがな」

「そっなのか？」

「あの人刀の収集家だな。類友って奴さ。士郎の丘にいくつか刺さってるぜ」

「そういえばあの魔術礼装はなんなんだ？ 私もあんなもの知らんぞ」

「そりゃそうだ。ありゃあ士郎が自分で作ったものだからな」

「なんだとっ！？」

「ガキの頃から戦闘経験積んでるせいか、手が足りないことを色々悩んだ挙句作ったのが、あの限定魔術礼装だ」

「そもそもどうやって作った」

「元を正せば金ぴかと綺礼だ。変化魔術の応用だな。宝具やら他の魔術礼装なんかから概念部分だけ取り出してナイフとか剣型のものに付与させて作ったモンだ」

「宝具から概念部分のみ取り出した、だと！？」

「つつても当然ながら劣化しまくってな。宝具と呼べるほどのモンじゃねえ。だが士郎にしてみりゃ十分だろ。ナイフとか剣型のものにしてるから投影で瞬時に作り出すことも可能だしな。とはいえありゃあ戦闘用じゃなくて完全に支援用だ」

「支援用？」

「投影魔術だけで戦闘力は十分だろ。だがまあ戦闘以外にはぶっちゃけ無用の長物だからな。後始末とか、証拠隠滅とかそーゆーのは

必要だろ？ 特にまだガキなんだし」

「つまりそういったものなんだな？」

「具体的には治療用とか、使い魔作ったりとか、結界張ったりとか、話中で出てきた魔力殺しみたいなのかだな」

「なるほどな」

「ちなみに士郎の奴は小遣い稼ぎとして、たまーに魔術礼装を売ったりしてるぞ」

「つまり、販売していても買い手が付く程度の出来では在ることだな」

「まあな。ちなみに売ってんのは投影品だ」

「……それは詐欺じゃないのか？」

「ちゃんと注釈付だぜ？ 破壊あるは相応に破損した場合は消滅します。消滅した場合はいかなる理由であろうとも当方では一切責任を負いませんってな」

「悪徳商法だな。ばろ儲けだろう」

「そりゃあな。一個作りやあ何百個と量産できるんだし。まあ不振がられるからあんまり出さないんだけどな。第一それで協会にこれが投影魔術で作ったものですなーんてバレたら事だし？ まあオルタと金ぴかがいるからな。最悪時計塔でもぶっ壊してやれば近寄ってこなくなるだろうケド」

「悪徳商法の裏についている暴力団みたいだな」

「ははっ。言いて妙じゃね？　つーかまんまだし。『文句言ったらどうなるか分かってンだろうな？』みたいな？」

「やっかいな……」

「ちなみにそれぞれ名前も付いてる。話中で出てきた、『魔術回路強制停止』のネックレスの方が『ハイドアウト』、『魔力の出し入れ不可』の指輪の方が『フォービット』だ」

「もしや『魔術回路強制停止』の方は、屋上で奴がつけているといっていた魔力殺しか？」

「正解。つってもデザインは違うぞ？　桜に渡した奴は桜用に女性を持つても可笑しくないようなデザインにしてあるからな。土郎用のはロザリオっぽい奴だ。一応実家は教会だから持つても可笑しくねーだろ」

「なるほどな。もう片方はもしかして彼女専用か？」

「お、さっすが大正解。『フォービット』は桜専用。蟲爺対策だな」

「アレだと魔力の出し入れが出来ないだけで、魔術回路はそのままだし意味がないだろうからな」

「だから両方つけないといけないのさ。桜の場合、片方だけじゃ意味がないからな」

「違いない」

「さあてそろそろ一区切りといくか」

「これで仕舞か？」

「あんま一片に出しちゃつまんねーだろ？ 情報は小出しにしないとな」

「まさか次ぎもまた私がやらねばなんのか？」

「当然だろ」

「ちつ。面倒な」

「文句言わなーい。あ、ちなみに読者諸君。今ここにいるアーチャーと、話中に出てくるアーチャーは別物だから注意しろよ？」

「ここで会話した内容は話中の私は知らん情報だからな」

「話中のアーチャーとほぼ同じ情報を持った分霊体って奴だな。揃って『座』に戻らない限り、互いの情報は知りえない。まあここにいるアーチャーは俺が書いた話を読ませたから知ってるんだけどな」

「とはいえ、作者がまだ書いていない部分に関しては私も知りえない。話中の私より、ここでの情報量がある分多少詳しい程度だな」

「まあこれが回を重ねていけばもっと色々知る事になるだろうけどなー。さ、とゆーわけで、作者と」

「アーチャーの（やつぱり棒読み）」

「「なぜなに双黒！」」

「第一回はこれにて閉幕！ 第二回がいつになるか予定は未定！
けどまあ、またその時にな！」

「次回まで気長に待っておいでくれ。ではな」

作者とアーチャーのなぜなに双黒（後書き）

セルフ質問コーナーでした。

活動報告でやろうかとも思いましたが、そっちはあんまり見る人いなさそうなのでこっちでやってみました。

今後も適当にセルフ質問形式あるいは、質問などあれば感想などで書いていただければこちらでまとめてお答えしたいと思います。

第二回がいつになるか予定は未定ということで、今のところ決まってません。恐らく、何話が更新した後になると思います。

それでは次回は前回の予告通り、『士郎見回りに行く』をお送りしたいと思います。

2月2日 / Opening of the stage .

食事を終えると、後の片づけを桜に任せ、士郎は自室へと戻った。五分ほど経った頃、徐にアルトリアが席を立つ。

それを見計らったかのように、居間の入り口に士郎が立っていた。先ほどまでのシャツとズボンの上にカソックコートを羽織り、首には赤い布がマフラーのように巻かれ背中に垂れている。

シャツとズボンは普通の衣服だが、羽織っているカソックコートは耐水耐火耐衝撃に優れ、魔術を用いて強化も施している特別製で、いわば士郎の戦闘服だった。

当然ながら首に巻いている赤い布も唯の布ではなく、とある概念武装である。

「様子見とはいえ気をつけてくださいね」

台所から片づけを中断して桜が顔を出す。

「ふん。私と士郎が揃って後れを取るわけなかるう?」

士郎の横へと立ったアルトリアが尊大に笑う。

「何が起こるかわからないのが聖杯戦争だろ? まあ実際あんまり心配はしてないけどね」

開いていた本から顔を上げ、慎二が肩を竦める。

「何もないければ日付が変わる前には戻ってくる」

それだけ言うと、土郎はさつさとその場を後にした。
後に続こうとしてアルトリアが不意に立ち止まり振り返る。

「外は寒いからな。暖かい茶と軽食でも用意して待っているがいい」
「はい、分かりました。お待ちしてます」
「仕方ないから待っててやるよ」

につこりと笑う桜に、肩を竦めながら苦笑いの慎二。
二人から返事を受け取ると、アルトリアは満足そうに笑って主を
追いかけていった。

深夜というにはまだ少々早い時間帯だが、住宅地であるせいか、
人影らしい人影は見当たらない。

まして真冬ともいえる今時期では、余計にひっそりとしていた。
寒さのために白くなる息を吐く土郎はコートのポケットに手を突
っ込み、ワンピースにコート姿のアルトリアはその横にぴたりとつ
いている。

特に当てがあるわけでもないため、二人はとりあえず新都の方へ
向かって歩いていった。

土郎は家を出る前に、昼間は常に身につけている魔力殺しの魔術
礼装を外してきている。

アルトリアも、家から出る時においてきた。

夜は戦いの時間だ。

そして今は、様子見とはいえ、獲物を誘い出そうとしている。

魔力殺しをつけていては、罔にもならないしとっさに動くことも
出来ない。

それに今の士郎は概念武装など魔力を持つものを身につけているから、隠す意味もなかった。

「士郎」

「分かっている。……見られてるな」

唐突な名を呼んだアルトリアに、士郎は表情を変えずに小さく頷いた。

気づかない振りをして歩きながら、慎重に周囲に気を配る。

「まだ随分と離れてはいるようだが……動くか？」

アルトリアが目を細める。

途端、僅かに空気が引き攣った。

隣に居る士郎には伝わるが、遠く離れた場所に居る観察者に伝わるほどではない。

「いや。様子を見る。近づいてこない限り、攻撃されてもお前は動くな」

「……了解した。どちらにしろ私は遠距離攻撃手段も防御手段も持っていないからな。この距離では動きようもない」

一瞬眉を顰めるが、すぐに仕方がないとばかりに肩を竦めた。

彼女の得手は接近戦。遠距離攻撃も防御も、得意とするのはむしろ士郎の方だった。

アルトリアが唯一持っていた防御手段も、今はその手にはない。

「士郎ッ!!」

アルトリアが声を荒げると同時に、士郎は首筋にぞわりとした

ものを感じた。

とつさにそちらに目を向けると、ポケットから両手を出してナイフ二本を投影しそのまま投擲する。

右手で投げたナイフは赤い刃、左手で投げたナイフは青い刃の、どちらも三十センチほどの大振りのシースナイフだ。

「『対物理対魔防御障壁 パープルウイング、全力展開 フルドライブ』ッ！」

叫ぶと同時に、投擲したナイフから紫色に光る壁が出現する。

この距離で攻撃を仕掛けてくるとなれば、相手はアーチャーがキヤスター！。

どちらか判断が付かなかったため両方使ったが、分かっていたら片方しか使わなかっただろう。

赤い刃のナイフは対物理攻撃防御障壁展開用の限定魔術礼装『レッドウイング』。

赤く光る障壁面に触れる物理攻撃を防ぐ障壁を展開し、剣や弓での攻撃は勿論、魔力を纏った武器での攻撃や、副次的に発生した小石なども防ぐことが出来る。

対して、青い刃のナイフは対魔攻撃防御障壁展開用の限定魔術礼装『ブルーウイング』。

青く光る障壁面に触れる魔術攻撃を防ぐ障壁を展開する。大魔術以外ならある程度は防げる能力があり、また大魔術でも、多少の威力軽減が出来る。

アーチャーならば前者、キヤスターならば後者だけで事足りる。障壁面が紫色だったのは、『レッドウイング』と『ブルーウイング』を同時に使用したためだ。

土郎の膨大な魔力を惜しげもなく使用した『全力展開 フルドライブ』状態の障壁ならば、Aランク宝具の攻撃すら、一撃ならば耐えうるほどの防御力を誇る。

そもそも、士郎自作の魔術礼装は全て剣をモチーフに作られている。

理由は勿論、投影魔術で使用することを前提としているからだ。士郎の使う投影魔術は、名前こそ投影魔術といって入るが、内実一般的に言われている投影魔術とは一線を画する。

本来投影魔術とは、既に失われてしまったものを僅かな時間、自身の伴わない外見のみのレプリカとして映し出して代用する魔術であり、実用性に乏しく効率性もコストパフォーマンスも非常に悪い。はつきり言って、実在する材料でレプリカを作るか、既存のものに強化なりした方が、実用性も有用性も耐久度も持続時間もはるかにマシというレベルである。

反して士郎の使う投影魔術は、対象が限られはするが、それら全てを覆す。

一度投影しさえすれば、何年放っておいても消えることなく、維持に魔力も消費しない。

オリジナルと並べるどころか、使用してもどちらがレプリカか判断が付かないほどの再現力に有用性。

拳句の果てには、神秘の結晶とも言える宝具の再現さえも可能とするデタラメさを誇る。

勿論制限もある。

基本的に対象物は剣のみ。

武器防具類ならば出来ないことはないが、剣から遠ざかれば遠ざかるほどに格段に大きな代償が必要であり、近代兵器に関しては完全不可能である。

だが逆に、剣でさえあれば、たとえ一瞬目にしたものであっても投影可能であり、消費魔力も非常に小さい。つまりは瞬間的にでき、かつ連続使用が可能なのだ。

こと戦闘に至っては、それはもう絶大な効力を発揮する。

なにしろ、手ぶらに見せて瞬間投影の後に攻撃が出来、武器の交

換も自由自在。持ち運びに関してはこれ以上のものはなく、どんな威力・効果を持つものであっても使い捨てが可能で証拠も残らないのだ。

使い勝手がいいにも程がある。

とはいえ、基本が剣であることから、戦闘に関しての有用性ともかく、それ以外は物の見事に使えない。

剣といえば武器。つまりは戦うためのもの。

戦闘力はガンガン上がっても、それ以外では無能もいいところである。

特に士郎の場合、他の魔術に関してはそれはもう清々しいくらいに才能がない。

どれくらいかといえば、ライター程度の炎一つ灯すよりも、宝具級の剣数十本投影したほうがはるかに簡単だというレベルである。

もはや比べるのも馬鹿らしい。

そこで士郎が考えたのが、そういった魔術効果を持つ剣を、限定魔術礼装として自分で作ることだった。

義父の魔術刻印を移植したり、別の魔術礼装の概念部分を模倣したり。

そうして作られたものの一つが『レッドウイング』や『ブルーウイング』である。

ちなみに、それらの限定魔術礼装は全て、実在し市販されているナイフを基に作っている。

『レッドウイング』はコールドスチール社製SRK。全長27.5センチ、刃渡り15.6センチ。

『ブルーウイング』はSOG社製シールチームエリート。全長31センチ、刃渡り17.5センチ。

どちらもかなり大振りのナイフである。

士郎としては隠し持っけていても不思議に思われないもつと小振りのものにしたかったのだが、今の士郎の力量で望む効果となると、どうしてもこのサイズになってしまうのだ。

とは言え、その効果は絶大にして有用。
一般的な魔術師に売れるどころか、結構いい値段がつくほどの出来なのである。

障壁が展開された僅かの後、ドンツと重い衝撃が走った。

光る壁と、高速で飛来したものがぶつかり合う。

見れば抜れた漆黒の剣だった。

矢でも魔力弾でもないそれに眉を寄せ、それでも反射的に解析魔術をかける。

（……カラドボルグ、だと！？ あれはフェルグスの宝具。たとえ召喚されていても、アーチャーにもキャスターにも該当しない！ ちよつと待て。何か違う。……名前？ カラドボルグ？？ カラドボルグではないのか？）

驚きに目を見開いていると、障壁を貫こうとする剣に僅かにヒビが入り、そして砕けた。

砕けたはずの剣は、破片も欠片も残さずに消滅する。

（砕けた上に、消えた！？ 本物ならばこの程度の障壁で壊れるはずがない。それにあの消え方。まるで俺の投影魔術だ。それにあの形。剣としては使いにくいあの形。俺が弓で射やすいように変形させた剣と、似ていなかったか？ ……待て待て待て。ありえん！ だが、もし、もしあれが投影魔術で作ったものだとしたら、まさか変化させた？ そんな馬鹿な！ だが、だとすれば、名前が違うのも、形が違うのにも、納得はいく。まさか、俺と、同じ……？）

呆然としている土郎の横で、同じくそれを見てたアルトリアも暫し目を見開いて驚いていたが、不意に近づいてきた気配と、かすかに聞こえた女の悲鳴、というか怒鳴り声に気づく。

声の方へ目を向ければ、遠くから赤いものが近づいてくるのが見えた。

呆然としていた士郎も我に返りそちらを睨み付けければ、怒鳴り散らす見慣れた少女を抱えた赤いサーヴァントが近づいてきていた。士郎は、やや離れた場所へ降り立った赤い二人組、特にサーヴァントの方をじつと観察するように睨みつける。

「おい、凜。ここでやる気か？」

アーチャーを睨み付けたまま、凜に声をかける。

その声音は睨みつける瞳と同様、凍りつかせるほどの冷たさと鋭さを含んでいた。

視線と声音に、凜が一瞬びくりと肩を震わせる。

「ち、違っ！ アーチャーッ！！ あんた、なんてことしてくれてんのよっ！！」

慌てて否定し、一瞬感じた恐怖を、勝手に行動した己のサーヴァントにぶつける事で誤魔化す。

「敵を見つけたのだ。倒すのは当然だろう？ マスター」

じつと自分を見つめてくる視線をあえて無視しながら、やや大仰に肩を竦める。

「馬鹿ッ！ こんな住宅街のド真ん中で、しかも準備だって出来ないのに、やりあつて勝てるわけないでしょ！？」

「しかし、マスター。ならばなおのこと、不意打ちで倒してしまわないと厄介だろう？」

「その不意打ちを防がれとい何言ってるのよ！ これ以上は攻撃

しない！　いいわね？」
「だが凜」

不満も露に眉を顰めるアーチャーに、凜は構わずに手出しを禁ずる。

「五月蠅いッ！　それ以上言うなら令呪使っわよ！？」

「……分かった」

「分かればいいのよッ！」

とうとう令呪まで持ち出されて、渋々ながら引き下がった。

惘然とした顔をしてはいたが、凜や士郎以上にこの場で混乱していたのがアーチャーだった。

事前に凜から言峰士郎の話を聞いていたとはいえ、甘く見すぎていた。

当初凜の話を聞いたアーチャーは、この次点での当時の自分と言峰士郎の差を、聖杯戦争の前と後程度だと予想していた。

（とんだ計算違いだな）

先ほどの一撃を防いだ障壁は結界宝具ではなかった。

とすれば限定魔術礼装。

『熾天覆う七つの円環』のような宝具ではなく、自身で作り上げたであろう限定魔術礼装で、まさか『偽・螺旋剣』が防がれるとは想像だにしていなかった。

そして最大の誤算となったのが、自身の存在に疑問を持たれていくだろうことだ。

先の一撃。

『偽・螺旋剣』の消え方と、投影魔術の破損時の消え方の類似に、彼は恐らく気づいた筈だ。

そして恐らく、解析魔術で調べもしたのだろう。

少なくともアーチャーには、士郎が驚愕で目を見開いて呆然としていた姿が見えていた。

降り立ってからアーチャーから視線を外さない。

十中八九疑われている。

同じ能力を持つものではないかと。

現実的にありえなさ過ぎて真相までは思い至らないだろうが、それでもその足がかりとなるには十二分すぎる疑惑の種となるだろう。昨夜の電話でも、昼間に屋上でも目にしていたというのに、すっかり頭から抜け落ちていた。

言峰士郎は、遠坂凜を手玉に取れる人物だと言うことを。つまりそれだけ頭が回る。

（能力以前にこちらの方が厄介だったか）

その差はむしろ、聖杯戦争前の衛宮士郎と今の自分といった方が近いだろう。

あるいは衛宮士郎と言峰綺礼か。

環境と経験の違いによる性格の変化など、今の今まで真剣に考えたこともなかったが、そうも言っていられなくなった。

だがなまじ根幹を同じくするという認識があるせいで、どうしても別人としては考えられない。

有利となるはずだった衛宮士郎の情報は、この状況ではむしろハズレにしかならなかった。

儘ならない状況に、アーチャーは人目も忘れて盛大に溜息を付いた。

「聞いたでしょ、士郎。ここでやる気はないわ」

その溜息を諦めとでも勘違いしたらしい凜も、安堵に溜息を漏ら

す。

「ふん。ここであつたが百年目とやらだ。士郎、ここで倒してしまえばいいではないか」

その様子を士郎の後ろから見ていたアルトリアが、この場で初めて口を開いた。

「つて、アルトリア？　なんだつてあんたがここにいのよ？」

思つてもみなかつた相手に一瞬目を見開くが、すぐに我に返つて相手を睨む。

「私は士郎のサーヴァントだ。共にいて当然だろう？」

「はあ？　サーヴァント？　あんたが？　……何言つてんの？」

にやりと笑うアルトリアの言葉に間抜けな顔になる凜だったが、その内容のありえなさに馬鹿にしたように鼻で笑う。

そもそもアルトリアと凜は顔見知りである。

そう何度も顔をあわせる相手ではなかったが、士郎を通じて十年近い付き合いがある。

相性が悪いのか、会えば必ずといっていいほどに口論が始まり、口論以外で会話らしい会話などほとんどしたことがない相手ではあるが、少なくとも、魔力の気配を感じたことはなかった。

「貴様は馬鹿か？　相対してもサーヴァントと一般人の区別もつかんとは」

やれやれとばかりに肩を竦める。

「馬鹿ですつてえ！？ あんた、実体だし、それに魔力の気配だつてないでしょっ！」

あからさまに馬鹿にされ、さらに面と向かって罵られて凜の頭に一気に血が上る。

アルトリアが小馬鹿にして凜がそれに怒るという、口論というよりは単にアルトリアがからかって遊んでいるだけだが、常と異なり、アルトリアの表情は真剣だった。

「受肉している。魔力は士郎の魔術礼装だ」

基本的にアルトリアは外に出る時は勿論、他人に会う時も魔力殺しは外さない。

外すのは入浴時と睡眠時、それから戦闘の時だけである。

故に、二人が会う時は常にアルトリアは魔力殺しを装備している状態だった。

実体なのは常時、というかそもそもアルトリアとはある事情により霊体化できない。

ちなみに初対面から数年間は士郎の魔術礼装ではなく、同居人の持っていた魔力殺しを身につけていた。

「……士郎？ どういうこと？」

流石の凜も、この状況でアルトリアが嘘や冗談を言えるほどユーモラス溢れる人物ではないことを知っている。

そしてアルトリアが士郎の許可なく大切なことを喋ったりするはずもないことも知っている。

故に、胡乱気に士郎を見遣った。

「どうもこうも……」

士郎が面倒くさいとばかりに肩を竦めながら視線を逸らす。

逸らして、その先にあるものを鋭く睨みつけた。

その視線の厳しさに気づき、凜もそちらを見遣り、そして目を見開いた。

「ねえ、もういい？」

視線の先には、鉛色の巨人を従えた、小さな少女が悠然と立っていた。

2月2日 / Opening of the stage . (後書き)

ちょこつとだけ戦闘シーン。

ちなみに『偽・螺旋剣』のとき、凧とアーチャーは一キロほど離れた建物の屋上に居ました。

見回り中にアーチャーが士郎たちを見つけて、凧に断りもなく問答無用でぶつ放し、士郎が止めたところで凧を抱えて飛びました。

作中で凧が怒鳴っていたのは、なんの断りもなく攻撃したことで突然抱きかかえられたことに対する抗議とかです。

ここで切らないと、なし崩しにバーサーカー戦までノンストップになりそうだったのでイリヤ登場で切りました。

ちなみにイリヤも変化アリです。

なにしろ士郎は衛宮じゃないので義兄妹になりませんから。

詳しくは次話で明らかとなります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2699s/>

Fate/Alternative -双黒-

2011年10月9日13時56分発行